

# 川柳の雑証

麻生路郎 ☆ 主宰



Pensoj flugas trans la land-limon  
THE SENRYU ZASSHI

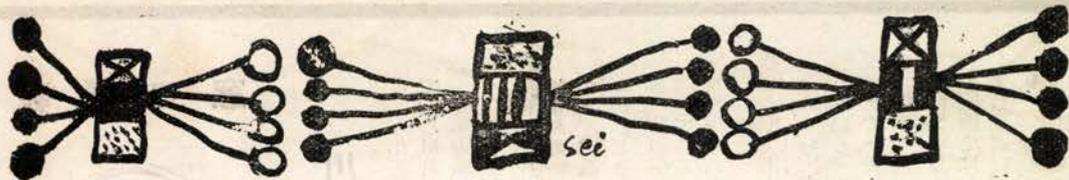
No. 374

七月號

昭和十二年七月一日發行  
昭和十二年七月一日發行  
（每月一回）日曜日  
創刊大正十三年・通卷三百七十四号







兵庫県 戸倉 普天

連休に見慣れぬ人が畑に立ち

山裾に住宅かいなマツチ箱

団交かいねじ鉢巻はとってくれ

豊中市 戸田 古方

地獄絵のバックの色は赤でよし

大阪市 西尾 栗

水煙あげて神輿は洗うもの

波止場までゆっくりあるくひとり旅

一人漕ぐボートはやけに速いなり

七回忌仏壇近くに座る齡

望遠鏡島の煙でもめている

大阪市 市場 没食子

先生のスト鳥肌を生じたる

道徳を語れば古いの封建の

西宮市 若本 多久志

月収が二万の理想へ嫁き遅れ

又パイプですかと捜してもくれず

ペレー帽かぶって家業継がぬ腹

酔筆と書いて政治家らしく逃げ

マネキンが着ていた時は似合うてたに

米子市 三鴨 美笑

どう見ても落ち候補の声がかれ

市計画古い庭園ぶっこわし

大阪市 正本 水客

旅婦り子供の寝息がそばにあり

暮れきってお寺の門にある牡丹

いい天気ですよと従妹たかりに米

奥さんに見えるやろかと恋ならず

信用の出来る屑屋と妻がいう

大阪市 丸尾 潮花

百合活けてユリの匂いのなかのひと

むりやりに止めて玉露が二杯きり

兵庫県 小西 無鬼

旅に出て郷里の宣伝怠らず

よほよほで未だ銀行へ出入りする

本心を管を巻いてる型にする

大阪市 西い わを

よろめいて居る間社会と遠ざかり

ホテル市 内藤 草一郎

入れ知恵をされて養子が遊び出し

ほつれ毛の美がないパーマもの足らず

東京都 宮田 不二

サインして貰いたそうな巡査の眼

写真向って一人置いてと無視される

大阪市 須崎 豆秋

杉になりたや千年という樹齡

赤線の女あんなまへ転向し

ホテル市 羽佐 間柳葉

スペシャルと書けば売れます棚ざらし

メーデーの布哇はレイの香に埋れ

唯物論人を冷たい者にする

堺市 吉田 圭井堂

もろもろの憂さを晴らした小コップ

質でなく量で扱けた刑務所

撰りに撰って力士に惚れた娘にあきれ

一張羅がまだ済まぬのに変る型

宇部市 国弘 半休

石投げて楽しむ子等もいる鳥居

大根に恥じ文数で笑われる

どしゃ降りであろうと燈台は光り

蠅取紙つかまるもんかと未だあがき

大阪市 太田 良子

授業参観親も一緒に赤くなり

ささやかな散財も妻はとがめられ

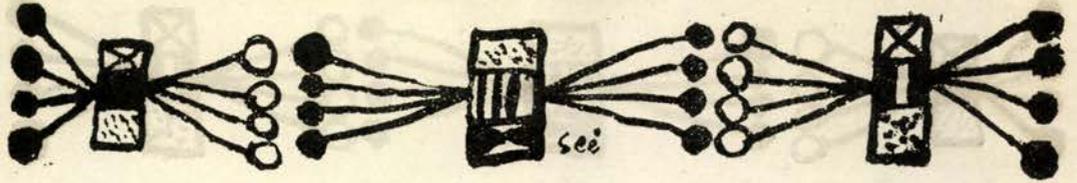
岡山県 直原 七面山

未亡人男に遠く座して笑む

市長当選妻と握手を写される

大阪市 西森 花村

お天気を息子がほめる下心



パチンコと濁酒で儲けた自家用車

鳥取市 河村 日満

よろめいてみよかも四十日の旅

金を喰う味で刺身もよばれとき

ストリップ五ドルの酒をなめて待ち

歪もってこんなうれしい顔になり

シャッターへ子等呼び寄すも旅ごころ

選挙ボスうちの五票も売っており

下関市 石川 侃流洞

五十歩百歩とんでもないこと倍ちがい

毒食わば皿まで貧乏するのなり

春眠暁を覚えず内職の疲れなり

海底トンネルバスで通って物足らず

倉敷市 木村 千容

味の素役で半世紀が終り

叱られてママの気まぐれ見破った

未亡人氣楽ですわと受け流し

ぬらりくらし逃げて課長らしくなり

社長自身訓辞のようにくらされず

如露持って暫し手形を忘れさせ

加賀市 野村 味平

大雨を降らして桜散りにけり

古馴染どうなとしなとそっけなし  
無力だと見たか女は寄りつかず

大阪市 木村 水堂

一票は汚職の名前覚えて居

運勢も当てにならない宝くじ

高槻市 福田 丁路

泰然自若唇を受け

気まかせの旅の荷物は傘一つ

結婚も離婚も親の云うままに

大阪市 真鍋 一瓢

浮動票ここのおじぎも氣に入らず

貸しもせぬのに内政へ口を入れ

生存競争今日も味噌汁オンリーだ

大阪市 後藤 梅志

遊んでる目に鉄骨の早いこと

ストをしたあとは病人ばかりふえ

防火用水まだ右書のまま残り

米子市 小西 雄々

再婚の夢をすてない未亡人

共稼ぎつづけるための子を堕ろし

妬まれてひばりの人気おとろえず

大阪市 吾郷 玲人

次期選挙までは用のない故郷

子を連れて拾い屋こどもの日も稼ぎ

ビル・ラッシュ空気圧縮されるよう  
珠算も記帳も出来るのに女給

大阪市 山川 阿茶

すくすくと育てば小児科喰てゆけず

強い様な弱いような男の座

大阪市 金井 文秋

遅刻せず来たのが将棋ばかり差し

退職金もろたが社宅にも居れず

オートメーションのように子供がすぐ生れ

大阪市 北川 春巢

仙台市医学会出張二句

仙台で酔うてもデカンショを唄い

バスガイド火事の件数までおぼえ

日航機東京―大阪間三句

見送りのなく羽田から発つもよし

呉か越か山陽の詠んだ雲が見え

下界には空襲知らぬ灯がともり

奈良県 尾崎 方正

破られる面会謝絶医者が病み

重態へ看護婦動くほか静か

山映の春をみんなにいたわられ

隠し芸もう一杯を飲んで出し

大阪市 武部 香林

団体の子へ駅長の手が拳がり

借電話ここで云えない事はかり  
師の書簡表衷心あたたかし



断った創価学会の捨ぜりふ

じり貧の虚空贖めた生返事

女房のカミソリ耳が邪魔になり

出雲市 尼 緑 之 助

アベックに踏まれた松露雨を待ち

俗人の俗に選挙運動員

大阪市 水 谷 竹 荘

老妻もはにかむ旅の家族風呂

役得で女を抱いた事がばれ

鳥羽にて

絵の様な赤い腰巻海女はせず

西宮市 小 沢 史 葉

師の閑居そろそろ蛙のなく季節

日南海岸

サボテンの青さ南の旅に居る

尼崎市 小 林 文 月

地下鉄に少女花持てりラッシュなるに

幼稚園遠足に添う母若く

読む本がないので早い爪を切り

ビジネスのように会葬すませて来

大阪市 富 岡 淡 舟

PTA女ばかりの中で照れ

ほんとうの恋は身を引く事にする

長女次女お金が貯まるひまもなし

防府市 長 野 井 蛙

公約を聴けば一票では足りず

機械化に生きる職場を狭められ

岡山市 服部十九平

再婚をあきらめさせた綴方

新米の集金地図を頼りに来

料理屋の料理に飽いたボスの舌

岡山県 大森娛句楽

ハナが咲きかけると部下がなぞをかけ

珍客をむげに帰した気がふさぎ

尼崎市 長谷川三司

株金に替えて嫁がす半パの荷

髭剃れば朝から何処へ行くんです

誕生の天皇白髪ふえ給う

仙台学会

学会の土産は山も雪でした

豊中市 足 立 春 雄

当選御礼今から公約忘れませう

臨終に泣かねば泣かぬとそしられる

熊本県 有 働 芳 仙

あの虹に気付いた人へ嫁ぎ度し

愛情の火種を家裁かき廻し

玄関で争うて来た顔をすて

貨車一つつき放された茜雲

広島県 山 田 季 賛

十円の道もあるけばなお遠し

機械化へ僕も機械に使われる

大阪市 山 本 葉 光

逆境の中で真面目に惚れられる

平凡に十年過ぎて幸とする

幸福に第六感が鈍くなり

ありふれた顔だと三面鏡おもう

加賀市 那 谷 光 郎

守銭奴の庭にも花が咲いて春

奥さんもエプロン姿なら値切り

商談へ来ない相手を持つ手酌

倉敷市 水 谷 谷 水

出し抜いといいて同僚へ気を使い

赤ん坊をまちがえました恥しき

倉敷市 梶 原 一 善

定刻に帰る苦勞を妻知らず

娘に意見するにもトラの尾踏む思い

台所まだ塩鱈が四半分

真夜中に鳴るモスクワのジャズバンド

其の中の一人が綺麗田植唄

打つかって敷なられておる他所見

岡山県 岡 田 夜 潮

老夫婦忘れっぽさを助け合い

年寄が年寄の年知りたがり



毆打されて父兄皮肉な礼を言い

玉島市 白井三林坊

教師父兄児童考え皆違ひ

父の子でないと言われた無性髭

茨木市 下山清潮

葉桜になって丹前日に干され

良妻か知らんが晩酌ねざりつめ

岡山県 本田恵二期

何くわぬ顔リベートに慣れた顔

うっかり亭主残念ながら敷かれとき

誕生日ことしも緑したたるよ

京都市 松川杜的

よろめいたは同窓会で逢うてから

釘を打つ事が好きです男の子

高瀬川砦の音が聞えそう

尼崎市 藤井春日

血圧が上がりますワとなだめられ

日進月歩最新地図の役立たず

凡児はん僕の云い度いことを云い

岡山市 津田麦太楼

黒焼の奇蹟小耳にはさむ年令

自転車に老妻乗せて慕まいる

若いのがやっぱり好きな未亡人

堺市 高崎雄声

嘘慾見栄うまくこなして出来た地位

終列車車掌も欠伸して別れ  
島根県 藤井明朗

酒飲みは酒の功德をすぐ並べ  
岡山県 永松東岸

六十一敬老会が気に入らず

応援は次の選挙へ出る気なり

人の良い人に頼んで悔残り

手紙米ぬ日は旧い手紙を読み返し

人の気も知らず列車は定時に出  
鳥取砂丘にて  
倉敷市 野田素身郎

手をつなぎ砂丘を子供のように駆け

サンデーは船場も閉まる労基法

市になってコマ切りの坪になり

社が歪みかけて赤旗ひるがえり

大阪府 伊達堰子

寄附の世話で出す気は持つとらず

せまかろと思うてかひ孫見ずに死に

あの野郎に又気の毒な嫁が来る

大阪府 不二田一三夫

お客様みな泥棒と教えとき

飴もたせ浄るりの顔見せておき

今月の水揚げ葬儀屋珠はじく

兵庫縣 酒井ひか平

小男の意地金持ちにならないでは

ここが薄うなつてまっせと散髪屋  
歳を知る程盃が長うなり  
宇部市 津秋六花

よろめいたを先生だから批判され

女あわれ顔の不出来を値踏みされ

大掃除隣りはラムネの音がする

冷蔵庫買う話だけの夏が来る

女患部屋覗いて見たい程に癒え

威張つてた時の鼻ひげまだそらず

岡山県 池田古心

八頭身と云うのが折れる程細く

レントゲン心の透視まで出来ず

鬱心勃々紫煙の行方追うデスク

辞表まで懐ろにして言えなんだ

退職の勸奨をしてゴルフに出

あの客は嫌いと云うもサービスか

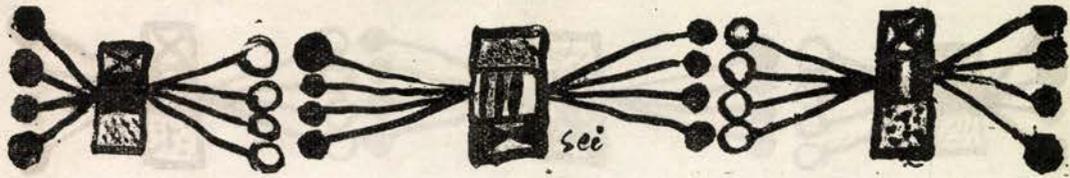
埋立ての好きな役人ばかりおり

奥さんの出来がよいので金を貸し

二等車が潺んでいるのが小気味よし

大阪府 早川清生

バイト演説してから自民党びいき



大丈夫かいな京都弁の運転手

少しなら飲んでもという医者に替え

職人としての日続く挿絵画家

道雄以後盲人海の音が好き

大阪市 武部 若菜

スピッツにはよくしゃべる口持っていて

遊び場をつくれれば被害つづくなり

聴診器の手にバラを摘みてやさしき

小松市 伊藤 茶仏

新刊書高いと言うてまた借られ

お盛んな頃とは違う杖を引き

面白いお方に内輪中座り

知恵貸してやれば逆襲する若さ

堺市 辻 圭水

先生のデモを子供は淋しく見

天気予報子供の日だけあててんか

舞台から拍手請求してしま

加賀市 中松 恒雄

下役の粗末な机ほど多忙

次々と逝く順番の淋しけれ

大阪市 児鳥 与呂志

右左ガイドの声にバスせわし

新緑を追うて此処まで来てしま

西宮市 小浜 牧人

嘘ついて女は行方知れずなり

長男を味方に妻の腰強し

課長からビール誘うも初夏の宵

男の子何になるかをまた訊かれ

苦しきも悲しきも詩の美し

食通のうちでは茶漬ばかり食べ

手術する便りが少し遺書めいて

岡山県 池上 知恵美

山の色一緒にほめる山育ち

叱られる覚悟の手紙今日も書く

都おどりからメーデーの街に出る

困われたままで小鳥の様に死に

端切れにも思い出多き未亡人

一口もきかずに化粧出来上り

菜の花を視野に交番眠くなり

下関市 中村 九呂平

どの珠も社運をかけた音はじき

喜びもかなしみも椅子黙してる

倦怠期知らぬ寝巻の色が派手

奈良市 宮口 笛生

気の弱い男になった手術台

陽あたりのベッドに古き入院者

看護婦の親切妻に真似られず

大阪市 池戸 桃村

世はまさに正直すぎる俺でいる

米子市 石坂 新雪

十位い嫁ぐ気もみせ見合する

病院は援護家庭の策もねり

大阪市 西川 晃

つけ黒子不倫な恋が燃えている

通天閣下界は悪が渦巻けり

名古屋市 野田 一念

女なる故に気兼ねのいる笑い

お隣りも雨でコトリとせぬ朝よ

政治的生命かけてお辞儀する

遊説をして見て悪路よくこたえ

岡山市 林 葵丘

春なれやニキビの顔に化粧もし

借りられるだけ借りてこの世におさらばし

自費で来た温泉一日だけにする

神戸市 仲どんたく

青春がのたうちまわるロカビリー

数で来いとばかりに垣ばら咲き揃い

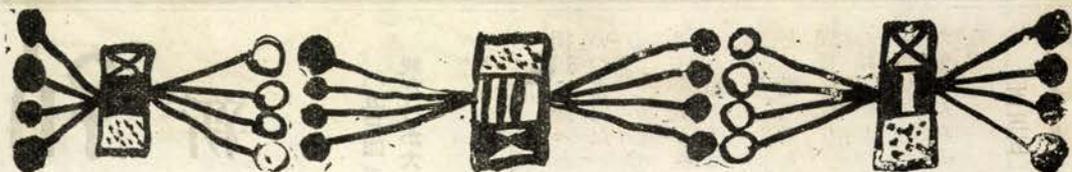
ゴルフ談ラッシュはずした車ではずみ

平田市 久家代仕男

政見を聞き倦きた顔の運転手

欺される酒とも知らずついていき

キロ売りの店へ老婦は寄りつかず  
大阪市 本多 省三



ニコヨンの背へ一票頼み込み

政見は汚職を知らぬ声でぶち子の腫には城より高い鯉幟り

大阪市 大谷 月都

出初めの蛙は石をぶつけられ買う方に廻って心豊かなり

上役のマツチが点いてホツとする

岡山市 江 国 幽 谷

電子計算器を見てから数学いやになり洗濯に困りましてと後妻持ち

岡山市 光 好 陽 子

ガミガミと云う父に解析がとけず何党も支持せぬ男で金をため

尼崎市 徳 永 鬼 美

流行は裸のようなものを着せハズ送るだけで三百六十五日過ぎ節約のためのパイプがよく似合い

西宮市 河 相 すゝむ

賃上げは賃上げりゆうとした身形末の娘の結婚父も年を取り

たまの日曜美事空葉にしてやられ大道で買ったは云わず便利やろう

顔なりと見せりや返えせと言うまいに急がない用だが逃げる手に使い

西宮市 野 呂 鶴 汀

思知った人が長屋へ尋ねて来

西宮市 樋 口 舟 遊

読み違いかんで含めて若いママ案内の好みて歩く京の春

新潟県 高野むじな

梅雨も楽し相合傘がある日本肩書の此の人だから売れた本

子が社党支持だったとは気がつかず

高槻市 辻 白 溪 子

釘一つ打っても不器用さが解りロカビリー聖書を読まぬ人で泥み

湯の街の橋は散歩の足をとめ

落ちそうな帽子バスガールは若し

嵯峨野吟行

新緑へ尼寺障子閉めたまま横笛の遺跡へ雨は降り止まず

大阪市 岸 川 漣

添い添げてからの夜道がこわくなり思い出の宿へひとりて来たセンチ

大阪市 欄 蘭

金婚式長寿法をも拝聴し

五月二日日本ラインにて

日本ライン窮屈にしぶきを浴びており妻も子も連れて今年は素面で抜け

大阪に住む義理済ます通り抜け

大阪市 石 倉 旅 風

大阪市 魚 住 満 潮

もう何も云うことは無し五十過ぎパン助と呼び同胞をかえりみず

ひと一人殺して理屈まだ並べ

ジラードは大手を振って帰えるなり仏壇を税吏帽子のまま覗き

よく動く女房の口を見ていたり

堺市 田 中 狂 二

火遊びもマダムとしての見栄があり

パバもママも小学校出とは子に云わず

立候補したが落選せずに死に

大阪府 林 昌 男

膝借りて女泣きたいことがあり

世話好きの裏からひよいと上り込み

今日きりの割引券へ妻を連れ

愛媛県 村 上 旭 童

焼け跡の整理エロ本見つけられ

乳のない子で誰れとでも眠むり

改めてせまい我が家と知る法事

新児童ウイオリン・サークル

講師 麻生アート

奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地

生駒 教室

TEL306バン

西宮市仁川町五丁目七番地

くるみ幼稚園

TEL638バン甲

★教室新設については新児童ウイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい



# 新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五三四〕

親だけが大事晩成まだ信じ

(薫風子)

大学を出て、コネで就職はしたが、さてそれからの出世街道は遅々として進まない。いつまでたっても係長である。しかし、親というものはありがたいもので、

「うちの子は大事晩成型でなア」  
と、誰にでも話し、いつかは課長になり、部長になり重役の椅子にもつくように信じ切っているのである。親としての愛情が巧みに描かれている。

〔五三五〕

バラソルをひろげて見せて

昨年よ

(初甫)

たとえ安物でも、今年の流行を追いたいのが、女性に共通した心理である。この句、無頓着なようには見せているが、去年のバラソルに何んとかなく、ひげ目を感じているのである。淋しい心境がよく出ていると思う。

〔五三六〕

ハイ耳掻きと秘書如才なし

(多久志)

ボヤツとして秘書の役はつとまらないのが常識である。社長の顔色一つで右か左かをテキパキと判断しなければならぬ。「ハイ耳掻き」ぐらいは秘書心得の第一ページだと云えよう。しかし、この句は女秘書を詠んだものであろう。

〔五三七〕

べんちゃらやないでと念を

押しほめ (日濤)

ほめるということとはむずかしいことである。むやみにほめるとべんちゃらにうけ取られる。この句はほめているうちに、自分でもべんちゃらと気づくほどにほめているので気がとがめたのであろう。しかし、そこには幾らかべんちゃらが含まれていることも想像にかたくな。

〔五三八〕

朧月光源氏に逢えそうな

(美喜)

おぼろに霞む春の夜にそぞろ歩るきをしている女性の恋ごころを詠んだものであるが「光源氏に逢えそうな」と空想をほしいままにしているところにこの句のよさがある。

〔五三九〕

孫ひとりこんなにおしめも

つて来た (古方)

他家へ嫁した娘が孫を連れて実家を訪れたのである。たったひとりの孫に沢山なおしめ持参でやって来たのに祖父

## 私の作句法

— 眞剣と熱心 —



尼 緑之助

川柳観が百八十度に転廻したので

す。文学青年を気取っていた私には川柳なんか軽蔑以上のもので問題外のものでした。

川雑支部を設け、他の一切の文芸を捨てて、川柳一本に進む決意をさせたのは路郎先生の気魄でした。即ち私には川柳の先生がなかったと申しましたが、それまでのいきさつなり環境のすべてが先生であつたわけです。ただすすめられて始めたものでもないから——いわゆる独学と言つた方がよいかも知れません。

それからと言うものは柳誌、柳書に対する気構えが一変し、おのずから熱心さが急変したわけですから。

そこで私の作句法は

川柳に眞剣に取り組むこと

それ以外にない——と主張した。いからくだらぬ前提を述べた次第です。

川雑不朽洞会の

美しいバッジが

出来ました

(35ページ参照)

一、句会に多く出席すること

二、投句を盛にすること

その結果として、多作、多説がついて廻ることになり、答として

がオヤオヤと驚いて斯くは詠んだものである。

この祖父から、おしめは遠い昔のものであった。自分等夫婦が娘を育てていたころにも、これだけのおしめは必要だったのであるが、そんなことは既に忘却の世界に追いやっていたので、今更のよう

に驚いたのである。平凡な日常生活から斯うした一コマをつまみあげたのは作者の力であらう。

〔五四〇〕

売春禁止

足洗いし女に履くものをやらす (挽郎)

世相のきびしさを皮肉った句である。売春を禁止する法律は作ったが、それらの女性を救うためのうけいれ体制のないことはなげかわしいことである。

〔五四一〕

お燈明消えたくるわの稻荷さま (麦太楼)

売春はなやかなりし頃の遊廓のお稻荷さまには商売繁昌

を祈願して或るいは又思うお方と一日も早く添われることを祈ったのでお燈明の絶え間がなかったのであるが、売春禁止で転業後のくるわのお稻荷さまへはお詣りする人の影さ

〔五四二〕

ロカビリー新興宗教よりさ (雑々)

わき

踊る宗教のように、新興宗教という、なんとなく騒がしいものが多いが、近頃流行

のロカビリーというものは、新興宗教よりも、もっと騒がしくて、一般人から見るとまるで気狂い沙汰としかうけとれぬと言ったのである。そういう観方も一つの観方には違いない。

〔五四三〕

酒の祖父今日の佳き日は大君の (玲人)

「酒の祖父」は酒好きのじじという意である。酒好きのお

じいさんが、何とか名目をつけて呑みたがることを詠んだものである。「今日の佳き日は大君の」生まれ給いし佳き日であると言って呑んだのである。おじいさんらしい雰囲気が句の上に漂うていて面白い

〔五四四〕

六段の調彼女のだからきけ (素身郎)

彼女の女が琴を習っていると

は聞いていた。たまたま訪ねたら琴をさらっている。さあどうぞと彼女の女のお母さんがその部屋へ招じられた。曲は六段の調であった。あまり上手ではないが彼女の女だから聞けたというのである。

〔五四五〕

熱燗を女たもとで酌いでくれ (望峰)

話に実がいりすぎて熱燗になった。女がたもとで酌いで呉れたというのである。その場合、女の姿態からうける情緒的な匂いが、酌がれている者のところを奪っているように思う。

作句法がおのずから身につけて来る。すべて熱心さの問題だと思っています。

「私の作句法」

について

「私の作句法」が好評なので、もうすこし続けてゆきたい。あの作家の作句法を知りたいと、思われたら編集局までお申込みください。取捨はご一任ねがうとして、でき得るかぎりご希望にそうよういたします。友の会の二、三の方から、腹乃先生の「私の作句法」を載せてくださいという声がある。編集局としても近い号にいただきたいと思っています。

(F)

川柳人の夏姿を涼しく美しくする趣味の川柳浴衣!

路郎主幹が自句を揮毫別染品、男女共通湯上に好適、頒価八五〇円送費六〇円御送金は川柳雑誌社宛

麻生路郎先生著

川柳とは何か

川柳の作り方と味い方

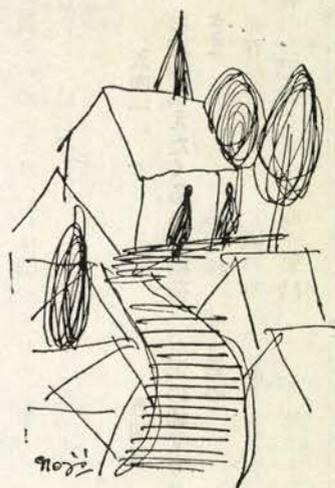
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにかして發生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

送価 二五〇円 三三〇円



東京都新宿区払方町27 振替東京29507



# 川柳における音韻について

北川春 巢

## 一、前書き

数カ月前のことであった。最近漢詩を作りはじめた一友人から質問を受けた。「漢詩は韻のことをやかましく言われるのだが、川柳には韻というものはないのでしようか?」と。

私は中学時代の漢詩の時間に漢詩の韻の説明を聞いたことをおぼろげながら思い出した。有名な頼山陽の「川中島」の詩(不識庵機山ヲ撃ツノ凶に題ス)

鞭声爾爾夜過河。  
睨見千兵擁大牙。  
遺恨十年磨一劍。  
流星光底逸長蛇。

を見ても、起、承、結の句の最後の文字「河」「牙」「蛇」が韻を踏んでいるのだ。中学の頃にはそれを聞いても余り興味を引かなかったが、今度この友人の話聞いた時には、一寸面白いなと思った。

中学時代の英語の詩でも韻のことは教えられた。これには当時から興味があった。

Twinkle, twinkle, little star,  
How I wonder what you are,  
Up above the world so high,  
Like a diamond in the sky!

今でもおぼえてゐるこの「星」の詩は (star) と (are) (high) と (sky) とが韻を踏んでいる。

ひるがえって我が国の詩を調べて見た。自由詩にはもちろん韻はないが、藤村あたりの五七調、七五調の新体詩においては、少数ながら韻があるように思える。例えば有名な「千曲川」の詩において

小諸なる 古城のほとり  
雲白く 遊子悲しむ

の「コモロ」の「コ」と「コジョウ」の「コ」とが韻になつてゐる。但し外国の詩は脚韻であるのに対し、我が国の詩は頭韻である所に違いがあるようである。

和歌でよく使われる枕詞について調べて見た。枕詞は言うまでもなく意味があつて

使われるものであるが、調子の上からだけで使われることもあるらしい。例えば「ししまの」は「やまと」にかかる枕詞で、ししまのやまと(ころを人間わば……)の歌などは有名である。枕詞で頭韻のあつてゐるのを探して見ると

「たまかづら」は「たえぬ」にかかる枕詞だ。まかづら絶えてもやまち行く道の  
手向けの神もかけてわかはむ

「たらちねの」は「母・親」にかかる枕詞として有名であるが、「ちちのみの」は「父」にかかる枕詞である。

「ちちのみの父のみこと ははそはの母のみこと……」という歌がある。

「ひさかたの」は「天・空・雨・雲」にかかる枕詞であるが、転じて「光都」などにかかるといふことである。

ひさかたの光のどけき春の日に……  
の歌は、百人一首の中にあつて有名である。

こう見て来ると、枕詞で下のかかる言葉と韻のあつてゐるものもかなりあると思わ

れるのである。

以上はあくまで私独自の見解であつて、歌人や国学者達がそんなことを言つてゐるかどうかは私の知る所ではないのである。俳句もやはり五・七・五調の韻文であるが、俳句に韻の研究があるかどうかは知らない。ただ日本語そのものの性質上、言葉がみんな母音で終つてゐる関係で、オ列とウ列の音は「壮重」、ア列の音は「壮大」、イ列の音は「繊細」、エ列の音は「典雅」、というようにことが言われてゐるようである。例えば

荒海や佐渡に横たふ天の川 芭蕉  
の句などは、ア列の音が多いために、一層壮大な感じがする、というように説明せられてゐる。

## 二、川柳における韻

我が川柳においてはこの関係はどうなつてゐるであろうか?

### (a) 頭韻

川柳における韻は頭韻が多い。(ここで韻というのは同じ音を指す。)例えば路郎先生の名句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

の上五、中七における「オ」が韻をふんでゐると見ることが出来る。(更に「思い」の「オ」もこれに拍車をかけてゐる。)このような句を手許の「川柳雑誌」から拾つて見ると、案外に数多く見当るのである。

よせて二で割ればなかなかよい夫婦

は上五、下五の「ヨ」が同音になっている。

サイン帖娘の夢が定まらず 麩生

男ならお相撲さんにしよう程に 笛生

押売りの女の媚びに買わされる 明朗

素うどんをすって真心通じ合い 喜楽

所で川柳は五・七・五の十七音で構成され

ていることは言をまたないのであるが、例

に見られる如く、上五・中七（の第一音）が

同音であることもあり、上五、下五が同音で

あることもあり、例にはないが中七、下五が

同音のこともある。川柳にはまた路郎先生

の言われているように、五・七・五型の外に

七・五・五型、あるいは二タ息で読むべき八・

九型、九・八型等々があることを考えると、

同音の文字がこれらの音字の上にある場合

も韻と考えて差支えないと思う。例えば

妻の坐のきびしきについ嘘をつき 喜由

これは「妻の坐」のツと「つい」のツが同

音であるが、「妻の坐のきびしきに」「つ

い嘘をつき」と二タ息に読まねばならぬ十

・七型の句であるので、やはり韻があつて

いると見てよい。

一家心中たもとに宝くじがあり 葵丘

この句などは「一家心中」が六音、「たも

とに宝くじがあり」が十二音で、二息に読

む句であるが、「たもと」のタと「宝く

じ」のタとが同音になっている。

こう見てくるといよいよ面白くなったの

で、手許の路郎句集「旅人」葎乃句集「福

寿草」豆秋句集「ふるさと」及び路郎選集

「私達」から、同音を示す句を拾い出して

見た。

(イ) 上五・中七に同音のある句

鯛焼けば鯛の臭いが残る也 路郎

ひとりあればひとりとは限りなくさびし

しづかさは白髪の話などをして

言ふだけは言へ言へ若さ失ふな

巻脚絆 巻いて貰った顔もせず

酒女酒で不惑に手がとどき

拜まれて女は泊る気にもなり

割箸を割ってもらってやに下り

雨風が逢いたい心つづのらせる

子沢山子に使われる年になり

ひげを剃る暇のないのも無事のうち

夜店出し余所の時計で去ぬ仕度

松の内まだ一軒を飲み残し 葎乃

秋さくらあまりに堅きベン皿や

奥さまはおひまがきの孔雀草

デザートを出たら灯もつき雨も降り

握飯二重に積んで子を連れる

知らぬ間に鹿に巻かれた立話

君もかと気胸で合うて悪びれず 春巢

長靴の中で一びき蚊が暮し 豆秋

橋筋は春の匂いのこうこ巻

風抜きへ風のサイレン鳴りひびき

春うららはさみほうちようかみそり研ぎ

愛の菓の朝のほうきは僕が持ち 東岸

湯豆腐の湯気の向うに妻の顔 同

親の恩オムツ洗ってわかりかけ 水堂

(ロ) 上五・下五に同音のある句

見渡すとユダの心をみんな持ち 路郎

つまり胃が悪いのんやと突き放し

嘘と嘘 女いよいよ美しく

草の根よ僕も鬪ふ草の根よ

門出の日牛へも言葉かけてやり

芳紀まさに六十一をばほえまむ

呑まず気であるに資本家ののしられ

者があつてのこととかるくうけ

さて呑むとなれば資本家先に酔い

若い燕切符を買って渡される

薄情と言はれうなずく薄情さ

湯ざめするまでお前と話を夢にまよ

髪結はぬこともしまつたの敷に入れ

立廻りの稽古もめし種のうち

薄情がどうしたのよと流行っ児

おもわくのある神棚のお供えや 葎乃

男げのないのがこわい母家建

雨雨雨パーも淋しきアズファルト

地下鉄へ出よとしたのに地下売場

貸浴衣着るが早い肩をぬぎ 豆秋

風の月なんば新地で引っぱられ

タンタンタンタンタン瀬戸内海は鯛を釣り

鬘落とすのを忘れてる人多く

恐ろしさ拾うて喫う気俺に見る 喜由

引き上げて泥をぬぐえばひとの子だ

死を悟る人の言葉の静かなり 日満

おなら一つ出すに医博のお手を借り 美秋

(ハ) 中七・下五に同音のある句

お元日坐るところへ坐らされ 路郎

弱点を握られていて二号にし

腐肉とは女の中のお女将さん

二人きりしっぺいなどをして遊び

祝電へ四角張るだけ四角ばり

病院はまだ迷彩のままで立ち

泊り客雨で枕をあてがはれ

砂ほり売れない品を裏返す

屋根に出て膝頭抱く闇があり

うどん屋の酒は足から醒めそう

信すれば弥陀の光の水の色 葎乃

ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる

恋人の坐ったとこへ坐って見 豆秋

二代目は刺される程の才でなし 日満

名声が人の自由をひっくりくり 凡九郎

(ニ) 五・七・五型以外の口調で読む場合

の同音の句

書齋はいいがみたことはなし 路郎

店子店子とただで貸すやう

金持だ胃痛だいつの間にか死に

君の酒はいいと言はれて松の内

三人が酔へば三人らしくなり

初恋も知らず博士は嫁をと

色事に疲れ糸切草を見る

さすが銃後桜は咲いただけですみ

とろろ昆布しほこぶ鬘志衰へず

後添が来て明け立てを軽くする

人妻になつて卑怯な眼を使い

アルムニウムかアハハと戎さん笑ひ

池に鶴残して一家都落ち 葎乃

あかしばなそのままの酒となり

いけすかない仲居も生きる姿にて

本堂の廊下素足となる埃

欄瓶を射通す檜の火を見つめ

夢に来た父はゆるもじの夏姿

記念品もろてきれいな首になり 豆秋

手を握って見ても手ぶらは淋しすぎ

お元日ばかりは小原の庄助さん  
面白くない日は重い茶碗なり 東岸子  
歯に衣をきせぬ社長に鍛えられ 春巢  
妾の子また美しい生れつき 丹治  
闘争に勝った途端に社がつぶれ 喜由  
蕨の声気にすりや幹事勤まらず 文秋  
信用があつて私用を言いつかり 水堂

(b) 重語法と疊み句について

路郎先生の言われる重語法や疊み句も、  
同じ音を繰返すのであるから、韻を踏んで  
見ると見られぬこともない。

これ以上は瘦せられぬ瘦せられぬ 路郎  
炭(ついで)炭(ついで)女をうらむ  
ビール(ビール)秋が来た(と)秋が来た(と)  
逢(ひた)かつた逢(ひた)かつた(と)裾をふみ  
あ(あ)ほん(に)ほん(に)と(あ)ほ(ぐ)後(の)月  
ほ(ほ)え(め)ば(ほ)え(む)恋(の)川(田)順  
ど(の)子(も)ど(の)子(も)息(災)で(お)元(日)  
われ(充)て(り)充(て)り(と)裏(の)菜(種)咲(く) 茂乃  
菜(の)花(は)あ(の)屋(根)の(は)て(屋(根)の(は)て  
吾(は)海(の)子(泥)を(立)て(泥)を(立)て  
豆腐(買)ふ(の)に(判)が(要)る(判)が(要)る  
こ(の)辺(で)も(う)酒(に)し(よ)う(酒)に(し)よ

飲んでほしやめてほし酒をうま 茂乃  
帆立貝(人)手貝(など)子に教え 母は米(ず)た(の)んだ梅(の)壺(も)米(ず)  
生鯛(の)皿(松)もぬれ(慰)斗(も)ぬれ 月(お)ほ(ろ)君(の)情(に)似(て)お(ほ)ろ  
か(こ)ち(つ)つ(な)げ(き)つ(つ)喫(う)巻(た)ば(こ)  
菓(に)水(かけ)に海(越)え(山)を(越)え 大(毎)も(止)ま(り)豆(腐)屋(も)止(ま)り

以上は同じ音を使った句を挙げたのであるが、前にも言ったように日本語の性質上  
同じ母音を韻と見なすならば、手許の「川  
柳雑詠」にも次のような句が見付かった。  
パス降りて(名)所の雨(へ)ほ(と)か(れ) 水客  
テ(て)、へ(e)、レ(re)、がエ列の  
韻である。  
女好(し)酒好(し)友(の)旅(便)り 紫香  
シ(si)、リ(ri)、がイ列の韻を踏んで  
いる。  
五・七・五でなく、二・三息に説(む)句を拾  
つて見ると  
ライター(が)つ(か)ず女(給)は(マ)ツ(チ)する 半休  
ズ(zu)、とル(ru)とがウ列の韻を踏ん  
でいる。  
倦怠(期)被(害)御(近)所(まで)及(び) 七面山  
キ(ki)、ビ(bi)がイ列の韻である。  
バネ(の)出(た)椅子(へ)容(疑)者(坐)ら(せ) 方大  
へ(e)、レ(re)がエ列の韻である。  
社(長)の(が)落(ち)門(衛)の(娘)が(通)り 省三  
チ(ti)、リ(ri)がイ列の韻である、と  
いう調子で、この部類ならば探せばいくら  
でもあると思うが、今は論じないことにす  
る。

三、結 び

私は川柳における音韻につい  
て調べて、多少は系統立てた積  
りであるが、あるいは似たよう  
なものを多数並べたに過ぎぬと  
人は言うかも知れない。私は  
多数と言ったが、句集の句数全  
体から見ればその数パーセント  
に過ぎぬこともちろんであ  
る。しかしこれらを通覧して言  
えることは  
(一) 川柳においても同音の韻  
を踏んでいると見れば見得られる句が、数  
の上においてはかなり存在すること。  
(二) 同音の韻を踏んだ句は一般に口調が  
よいこと。(どの型の韻が最も口調がよい  
かは、各人の見方により異なるかも知れぬ  
が……)  
(三) 路郎先生の言われる重語法の句、疊  
み句等も音韻があつている関係上、口調の  
上で大いに得をしていると思われること。  
(四) 但し作者の頭の中には、初めから同  
音だとか韻だとかいうことは、考えになか  
ったに違いないこと。  
などである。句を推敲する場合に、舌頭  
で干転させている間に、いつの間にかこの  
ような姿の句になってしまつているのだと  
思われる。

御贈答にはそごうの  
**商品券**  
300円~10,000円  
大阪店・神戸店・東京店 各店共通  
大阪・心斎橋  
**そごう**

路郎先生のいつも言われる通り、言葉と  
いうものはその句に適したものはただ一つ  
しかないのだ。その言葉を探し得たかどう  
かがその句が成功するかどうかの鍵である  
たなら発表したい。

わけだが、以上の論述からすれば、言葉は  
意味の上からだけでなく、音韻の上からも  
適、不適を考えなければならぬと思う。  
口調が整つていて耳に快いということも、  
名句の一条件であるからである。  
以上は漢詩、英語の詩、新体詩等からヒ  
ントを得ての私だけの考えである。川柳は  
十七音字である、というだけで他に川柳に  
おいてのこのような音韻上のことについて  
の研究を私は未だ寡聞にして知らない。し  
かし果してこれが川柳における音韻の研究  
になつていくかどうか私には分らない。  
大方の御教示をお願いする次第である。  
脚韻をア列・イ列・ウ列・エ列・オ列等  
に分けての分類研究は、丁度漢詩の平仄の  
研究に似ていて、川柳においてはまだ深く  
調べて見る必要があると思つている。後日  
の研究にまづいて、何かの方則でも発見出  
来

(c) 脚 韻

以上述べた如く川柳には頭韻が多いのだ  
が脚韻を踏んでいると見られる句もある。  
疊み句(初刷も句)ひ  
大杉を殺し思想を取り逃し  
みな呑んでるぞビールが散るぞ夏  
樽曳の影と大根を干した影

路郎

以上述べた如く川柳には頭韻が多いのだ  
が脚韻を踏んでいると見られる句もある。  
疊み句(初刷も句)ひ  
大杉を殺し思想を取り逃し  
みな呑んでるぞビールが散るぞ夏  
樽曳の影と大根を干した影



# 家族会議

東野 大八

本日の休日の晩酌はいつもより一本多い、悪がるはずがない。そんな父ちゃんのシオどきを見計ってか、子供の一人が

「これから家族会議をやるうと思

います」

「家族会議？」

「異議なし」

「議長をきめたいと思

います」

「言

い出した一番上の子が私を黙

殺してすましてあたりを見回し

た。

「お前がやれ」

「私は、ごシメイにより議長を引

見せなかつた人團だった。そんな奇妙なとっさの感慨もどこ吹く風。

「でははじめます」

五百三十めがそういつて、かねて用意の新しいノートを手の下にとりだし、表紙をめくると手ぎわよく、パリッとしごいて鉛筆をとりあげた。

「ハイ」

「英子ちゃん」

「朝おきてごはんをたべるまで、みんなお家のお手伝いをしたい、そのやることをこれからきめたいと思

います」

「ウム」

にぎつたお銚子の手をとめて私は、年甲斐もなくムツとした。

「はい、おカアちゃん」

「お父ちゃんの夜のおそいのやお酒は、会社のお仕事の具合があるので、仕方がないときもあると思

います」

「では、そういうことのないときはお早くおかえりねがいます」

と長女。

「わかりましたネ、お父ちゃん」

余計なこれは末っ子だ。

「うん、うん」

と。苦笑一ぱいの私。

「はい」

「はい英子ちゃん」

「会社へ行くお父ちゃんを、明日からみんなで、いつていらつしやい、ということにしたいと思

います」

「イギなし(と一同)」

(サニ、言つてやがんだい、チビのくせに……)

とはこちらのハラのうちだが、妙に反対側からシュンとしたものが頭をもたげてくる。

それから議事は進行して、いろいろな議題がとび出してきた。末っ子は一年生になったんだから、いつまでもカアちゃんといつしよに寝ているのはいけないからやめよう。とか勉強は一日必ず一時間

すること。マンガの本はキチンとセイトンしましょう。お使いはイヤな顔をしないで、いつでもやり、よその子とは仲よく遊ぼう、などなど。

こうなると、こちらもいつしか顔もほころびてきて

「よし、それを実行したものに一等賞にお父ちゃん賞として五十円あげよう」

ということになった。

「マア、うれしい」

と末っ子が手を叩くのへ

「今日きめたことは、すべて実行してもらいたいと思

います」

ノートを手にして一同の議事録作製にかかる書記長になっている。子供も大きくなったものだ、何かの本に出ていたが、どこかの田舎で、親爺さん不信任案を出した長男、次男や長女、次女が、選挙と長男が票をせり合い、結局決戦投票の結果、長男が家長の座についた。口惜しがった親父が

「この選挙の有効期間は三年だぞ」

と大まじめで念を押したということが出ていた。こんな話がこここで出はじめると、この家族会議も親父たるもの、やがてはアンカンとしておれなくなってくることは必定である。妻子四人、すべて女、黒一点の男性は最高権者の私一人である。同情票こそ、大衆の感情、意志でもあるという当節の選挙である。

それから数日、六月一日の私の誕生日に当って、長女が小さい紙包を一つくれた。

「お誕生日おめでとう、さてこの中には、何が入ってるでしょう」

私は軽いその紙包を手を、幾分その心根にしゅんとなりながらも、大ニコニコで

「さあ、なんだろう」

とうれしくはずんだ声をたててみせた。あけてみると中から、ピンと角の張ったタバコの新生が一つ現れた。

「ありがとう、ありがとう」

私はがらにもなく心からそうくりかえしてカアちゃんの顔をみた。彼女もここらからうれしそうに

「いいものをもらつたねエトウちゃん」

と明るい微笑。こうなるとわが家族会議の議長を、名議長として信任せざるを得なくなるね、私も改めて哄笑である。その夜、女房と二人になってしみじみとこう私は述べたことである。

「こんな調子だとあの議長どの、これが私のご亭主でござんすと妙な男を今につれて現れるぜ」

「それでいいんじゃないの、私とあんたはそれのときこそ、苦勞しながら茶の相手、ということになるワ」

うれしくてやがて哀しき……ウ飼かな、でなくて人生だとサツつたのは、それから一人床の中に入ってからだった。

この家族会議は、私の誕生日を第一回に、毎週の公休日にはかならずつづけていくそう

# 句評リレー



大阪府

宇部市

下関市

兵庫県

米子市

後藤梅志

津秋六花

石川侃流洞

小西無鬼

三嶋美笑

梅志氏提出 (川柳塔三月号)

身ぶるいをして小便のすむ  
寒さ

あと味の悪くない句として推したい。此の句には、実感の句の持つ強さがありますね。凍てついた道、荒れた土くれを包んだ雪。そうしたものを感じさせ、一字も無駄がない。

六花―一応は整ったように見えて実際とは違って、作者は冬の句に作り上げておられます。小便の後身ぶるいするのは、温湯を放出した後の、体温の下る場合に出る現象が、夏でも、こうした身ぶるいの出る事を知って居れば、「すむ寒さ」の下五は自ら違って来るかと思えます。私は自温で、ヒヨコを育たてるのが本業ですが、含水給餌と言って、別に水を与えると、体温が一時的に落ちるので、飼料

に水を入れドロドロにしてやつて居る關係が、実感が湧きません。侃流洞―私も実は、この句は実感

句の強さのある句だと思ってマクした句なのですが、六花さんの言われるように、夏でも小便をしたあとと身震いすることの経験はありますが、普通の場合、やはり寒さの方が大部分のように思えます。梅志さんと私は同感で、小便

と言う上品でない言葉を極めて上手に句に盛っている所が、表現技巧上においても推したいと思つて居る。美笑―私はこれでよいと思つて居ります。句が佳いと言う意味ではありません。実感の句であることは間違いない。無鬼―侃流洞氏の評で尽きていると思つています。夏だ冬だでなく、冬として受取るのが当然と思つて

す。

梅志―この句は下五の「すむ寒さ」が生き極めて巧みに肉体の生理を借りて自然の描写をした。句主は恐らく医者だろうと直感した。田舎道をくるまに乗り患者先に行く医者を一寸想像した。お医者さんは外の凜然たる寒さに震え上つたのだらう。

侃流洞―前にも述べた通り、実感の句として、あと味の悪くない句として頂きたいと思つています。

六花―第一回の評に夏冬問わずと思つて見今二回目を繰返し読んで居ると下五の「寒さ」が非常に強くきいて実感を出して居りました。やはり冬の句と取るべきでした。

美笑―私はこれでいいと思つています。無鬼―私も同感です。

梅志氏提出 (川柳塔二月号)

人買いを父が居らない程探し

この句は一寸説明を要するかも知れない。誘拐された恐ろしい小父さんと行を共にする内、いつしか情がうつつたと見え、或る時ふと恐ろしい小父さんが居なくなつた時、本当の父を探す如く探じたと言ふ童心を働いたもの、何となく人情のうつかりに空恐ろしいものを感じる。人買いと言つては居るが、誘拐魔と言ふものもあり、今の時代にもあてはまる事でしょう。

六花―心理を働いた句で上

々の出来で申分ない句だが、川柳は庶民文学である以上、あまり説明を要する場合は一般大衆から愛され

まい。我々は川柳人のみの川柳でなく、誰が読んでも成程とうなずける川柳であつては

しい。こうした作句は一考を要するのではないかと思ふ。

侃流洞―人買いと言ふ言葉が既に現在では通用しないような時代であつては、何だか古くさい感じがしますね、多分誘拐魔の新聞記事で、誘拐された子供が親の許へ帰

れず共に働くとした様な記事があつたと思つますが、そんな事から生れた句だろうと推察はしました。然しもう少し時代にマッチした様な表現にならないだろうか、句から受ける人情は確かに私共の心を働くものがあります。

美笑―人買いと誘拐とを混同して皆さんが説明をしていられるが、人買いを職業として居る者は誘拐はしません。又当然の身代金を払つて行きます。人情もあります。貧乏な親より案外子供にはたのしいうれいのおじさんです。この

迅速で・経済的

## 東京・静岡・名古屋へ御進物品

マツザカヤの

### 直配承り

お中元には... 暑中お見舞に

二・三種類の好適品を取揃えております

3階 御進物相談所



大阪 日本橋 松坂屋 電話 (64)1531

(名古屋以東の中元) は7月15日まで

句はこれではいいではないでしょうか。

無鬼―私は世間の恐ろしさを感じます。世の中にはまだ人買いと言ふ職があるのだろうか、子供や少年達を生活の為売り飛ばす封建的な思想がそのままあるのだろうか。

そしていつの世に澄むか社会の汚ない一面を覗かされた気がします。

梅志―美笑さんはいい事を仰しやつた、ちよつと作者の魔術にかかつたような気もするがしかしこんな句も面白い。小説でも読むよう

で。侃流洞―私も完全に魔術にひかされた様な気がします。然し人買いを實際に楽しいうれしいものを感じることはあるのだろうか。現在の私の感覚ではどうも解し得ないものがありますが、句に盛られた人情味だけは判るような気がし

ます。

六花―人買いを誘拐と取る取らぬでなく「父が居ない程」が非常に少年の心をついた処が句全体を生かして居り、頂ける句ですが前回の評の通り説明をする点で一寸考えさせます。

美笑―政府は兒童憲章などと表面では言つて居りますが、實際はまだまだ、現在でも縮く事がありましよう。川柳にもこんなのがあつて皆んなが知る事もいいではありませんか。

無鬼―いろいろ勉強させて戴きました。

梅志氏提出(川柳塔一月号)

特派員自然の描写から始め

清生

そこはかとなき特派員の気苦勞も見え、さらりとした、あくどさを感じさせない、うがちの句です。この句には深さがあります。それは作者の持つ教養の深さです。私がこの句を推す所以のものは、川柳塔が作品の精進の場所であるにもかかわらず、依然として平凡な低俗なとしかとれない句が多く、この句の持つ味の深さ、取材の広さと言うようなものに注意を喚起したい意味もあります。

まことに失礼な申分です。

六花―低俗な穿ちの効き過ぎた句を川柳なりと思つている者からは一寸物足りないかも知れないが、こうした深味があり一見ピンと来る判り良い句であつてはしい。真

理をつき、人の心をゆすぶる表現にしたいと思ふ私にはいの一に一番に抜きたい気のある句である。

侃流洞―句のさらつき、持味の深さといったような見方からは同感です。低俗な穿ちの効き過ぎた句と言つても、あながち川柳にあらずと言ふ訳にも行かず、その句はその句なりに又良い所もあり、斯の様な句が川柳の代表となるべきものだとも言えない様な気がします。

美笑―この句に對し特に上出来だとか言つてほめるのも可笑しい。川柳は詩や小説とは、同じことになりませんが、川柳には川柳としての持場があつてこの句はありのままを句に出しているから非常に好感がもてるので私は正直な句として味わつております。

無鬼―深く考えれば如何にも特派員の心勞も察せられない事はないが、そこまで考えるとむしろ特派員のセスチュアーが大きく浮び過ぎて句の価値が減る様に思ふ。このまま受け入れてははあんとする程度の句と見度い。

梅志―随行の特派員が、巴里へ来てセーヌの河畔に立つている姿などを目に浮べました。そこはかとなく郷愁をもつてペンを取る記者

―無鬼さんどうでしょう。ケレン味のない着実な叙法と言うものは句の底になだらかなリズムをたたえるもの、それがこの句の値打だと思ふ。が決して代表と言つて

いるのではないから間違わん様に

して下さい。

侃流洞―みんな意見が出そろつたといった感じですが。他に何も言う事はありません。

六花―第一回同様何度読み返しても近つき安さがあり穿ちもこうした表現にもつて行けたらと感して居ります。

美笑―佳い句だとは言えないがただ前回も申しましたように実感句でしょう。

無鬼―私は最初梅志さんが仰言る様な派遣先の事もチラと考えましたが、後所謂帰朝報告の場面を想像しましたので前回の様な言い方をした訳です。

六花氏提出(川柳塔三月号)

紋付が異つてるに感づかれ

九呂平

今時礼服は我々庶民階級では大抵衣裳屋の世話になる。時に紋の違つたのも身に合う限り借る事もある。此の句下五「感づかれ」とあるが、実は感づかれた様な気がするのでも借衣裳なるが故であり、ギョロリ横目で見た方も案外借りものかも知れない。「感づかれ」と言い切つた所に異つた(違つたではない)紋付を着た心理を強く表現して居て面白い。弱いものの心理である。

梅志―忌憚なく申しますと、都会では紋付と言うものが既に滑稽に感じられるほど、生活様式がかわつて来ました。ですから紋付が異つたとか感づかれたとか言つて

余り関心を持たないでしょう。併しこの句は内省的な句で自分の心をとがめた?句として淋しきは出ているが佳句としては受取り難い。

梅志―皆さんのお説で尽きて居る様です。

六花―紋付が時代はなれして居る居ないでなく、借衣裳の心理を上手に働いて居る事に関心をもつ可きではないでしょうか。

美笑―繰り返して読んで見てもピンと来ません。

侃流洞氏提出(川柳塔三月号)

仕事始め金はなくとも飲む

季費

仕事始めは仕事をするのかと思つたら、何の事はしない。御役所のカッチン飲みをしたらもう何の用事もしないばかりか、仕事を持つて行つたらお目玉頂戴。壁には「サービス向上」「能率増進」とか何

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀

葎乃

句集

福壽草

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雜誌社

新書口張大阪七五〇五番 電話住吉(6)六〇八一

定価二百五十円

送費 三十円

菊半型・函入

とか書いてある。  
梅志「正月早々にも拘らず素寒貧に限って「呑もうか」と来る平社員心理を働いて面白い。ちよっとユーモアを感じさせる句だが、役所の非能率にまで発展させる句ではないようです。

六花「職人階級では仕事始めとは呑む事と昔から決り切って居る、私は在鮮時代土建界の飯を喰って十三年暮したので、此の句は只あたり前の事をあたり前に表現したに過ぎず、会社や役所などに持って行くなら上五を仕事始めとしなくて、下二端から平社員にした方が良かったのではなからうか。

侃流洞「梅志さんの言われるように役所の非能率まで持って行くのは無理かも知れませんが、確かに非能率と関係があるんです。

勤務時間以外なら正当なんです、役所の仕事始めとは、勤務時間の総てを勤務として飲むんだから困るのです。

会社あたり此の句を持って行くくと実感は出ません。仕事始めと言う事は大体お役所用語と解釈したいのです。

美笑「現在では仕事始めと言う言葉は役所ばかりとは言えなくなってきましたが、此の句はやはり役所が当てはまるでしょう。さて評をして見る程の句でしょうか。この句の弱いところは上五がどんな言葉でも持って来られますから「金はなくとも飲む話」ではネ。  
無鬼「仕事始めはお役所と請負業

(土建等)の場合とでは其の趣が自ら違ふ。

此の句はお役所の一風景と見るべきでしょう。請負業関係なれば六花氏の言われる通りですから、梅志「作者のねらいはうなずかれますがやや低調の感があり損な句です。この辺で打切りたいが

侃流洞「私も公務員で、あまり言う」と私の身にも及ぶので、この位にして……。

六花「お役所の仕事始めに取る場合と請負関係の場合とでは自ら感じ違いますがどちらにも取れる所に上五に物足りなさを感じます。

美笑「普通の句で、何か句会の席題でも選をする様な気がいたします。

侃流洞氏提出(川柳塔三月号)

時間中に散髪しといて残業

素身郎

勤務時間中の散髪は、勤務時間中に伸びた分だけの散髪は、勤務時間中に伸びた分だけの散髪、つまり公務執行中に起因するものだから、何も言われる事はないのです……とでも思っているんですか、いや汗顔の至りです。せめて残業だけは止しましょう。

梅志「これはよくある風景です。皮肉な句ですが、残業が主となって居り勤務中散髪はもう当り前になって居るのでしようから、大目に見てやりましょう。素身郎さんの句ではこの句より(三月号)

「あの方の草書が母の気に入らず」の方が面白いようです。

六花「お役所ではよく見受けられる風景である。多忙だから残業するのでではなく、残業手当欲しさがこうさせるもの。一寸皮肉が強過ぎるが、此の位に皮肉らんとピンと来ない役人とはなさない次第である。

侃流洞「丁度三月号を受取った時に、私は役所の能率の悪い事をお客さんから散散にやられていた所だったんです。そんな事から川柳塔を見たら前の句と此の句です。大いに反省させられたんです。

美笑「ことさら「残業し」と下にもって来たことが私はすきませぬ。別段残業でなくとも、奥様と映画でも結構、勤めの者はこんなことは大びらですからあまり皮肉らん方がよいではないでしょう

無鬼「サラリーマンの急所を働いて余す所なし、ギクリとさせられる句です別に超動手当を貰う肚はなく共、一寸気のひける句です。表現もこれでよいと思います。

梅志「御意見がバチバチの様ですが、私はもっさりした句だと思えますね。句意はよく分るが、時間中「散髪」残業とこう言う風に並べては佳句にはなりません。着想も平凡。

六花「私は根っからお役所が嫌でたまらないので非能率的な点をギクリさせた所がきいて表現もこれで良いと思つて居ります。

美笑「ことさら残業と皮肉らない事を好みます。

無鬼「残業と来たから私にその皮肉さがより一層きつく感じられる訳です。

無鬼氏提出(近作柳塔三月号)

除夜の鐘サラリーマンは数

粗影

恐らく純サラリーマンの大晦日の風景でしょうが、サラリーマンがよく利いて半サラで家に店を持つ私として羨ましい静かさを感じます。除夜の鐘は百八ツと聞いては居るが五十年此方、毎年三ツ四ツ聴くだけで、教を読む余裕がない。平凡な様で除夜の純サラリーマンがよく表現されていると思います。

梅志「無鬼さんのお説の如くサラリーマンがよく利いています。また「教をよみ」が確かな描写になつていますが、全体として迫力に乏しい作品です。私はこの作者の作品を注意して見えています、もっと確かな作品が二月号に見えています。確かな作家だからまだまだ良い作品を発表するでしょう。

六花「粗影氏の句としては一番心安く近づける表現です。教を読む所に青白い細形のサラリーマンを思い浮かべます。退社時間が来れば書きかけのペンを置いてサツサと帰れるサラリーマン仲間でも、こ

うした除夜の鐘を読む部類の人間は案外融通のきかぬもの。



# 産前・産後と

発育期のお子さまに…

カルシウムやビタミン等がふだんより五割も余分に必要の時です…ミルカルは沢山のカルシウムの他ビタミンやミネラル等を含み全部無駄なく吸収される程衣錠です。(120錠)400円・(300錠)800円

総合ビタミン・カルシウム剤

# ミルカル錠



侃流洞—この作品は句会等でよく顔を合わせる作家であり、人物もよく知っているので、作者の個性がよく出ていと思うのです。凡に似て凡にあらざる鐘の数を讀み乍ら今年一年を送っているサラリーマンのゆとりがよく感じとられます。

美笑—この句はちよつと變つていふしたサラリーマンでなくとも私にはよい勉強になりました。

無鬼—以前から誌上で作者の名前が目に残つて妙に忘れられないんです。

梅志—よく分かりました。作者に敬意を表してこの位で止めましよう。

六花—除夜の鐘を讀むゆとりが恨めしくもなりました。作者は私の会員ですのでこの辺でやめましようか。

美笑—川柳でこんな特異の句のあることは面白いと言つて、味のあることでしょう。

美笑氏提出(川柳塔三月号)  
男つて大變ねえとまるめられ

方大  
A、ちよつとした割烹あたりで飲んで帰る気持が、うまく女につられて、高くついたと言うのがミソ、面白いと思う。

B、下五の「まるめられ」が句を好感つけている事ではないでしようか。

梅志—この句は私も三月号で十句程チェックした中に這入つていま

す。「男つて大變ねえ」とたまたみこんだ呼吸が、如何にも婉然とした女の肢態を思わせ注目したが、どうもすぐ忘れ去る作品のようにも感じた。まるめられと言う下五がこの句を生かし、また一面この句を通り一べんの句にしていい。

六花—「大變ねえ」と言つて居る処から見ると妻君ではなく小料理屋かバーの女と見るべきか、まるめられとは言つて居るが、欺さる事を百も承知の男丸められた様子を以てしてそれで結局は矢張り丸められるのだから男たるもの女から見れば他愛ない動物かも知れない。下五やはりまるめられと、した処に良さがある。

侃流洞—下五の丸められが案外面白いようで、この句の「男つて大變ねえ」と言う呼吸に合つていない様な気がします。

無鬼—確かに「丸められ」でこの句が生きて来ましたが。みんなまるめられそうです。

梅志—十二字も使つて最後を「と」付けにする。こうした句にはどこか無理があります。これはある意味で経験作品の常套手段でと言へば失礼だが、少し臭みを感じます。その意味で丸められがいやですがこの句の場合はこれより仕方がない侃流洞さんの疑問はそこらにあるのでしよう。

侃流洞—梅志さんの言われる様に言つて仕舞えば何だか気の毒の様に

に思いますが、実は私もその様な臭味がいやなのす。  
六花—中七「大變ねえ」の臭味を下五のまるめられて完全に支えている感がします。  
美笑—こんな軽い句が川柳でも好感を持っておりませう。評は皆さんでどうぞ。

美笑氏提出(近作柳塔三月号)  
教養に嫁して独りの世が続

水断  
A、ニコヨンでもいい夫婦の愛情を欲しているが、さてそうかと言つて夫の社会活動を満更嫌いでもない。川柳感がよく出ていると思ふ佳句と言ふ訳ではないが。

B、表現が古いから「教養に嫁してよるめきたくもなり」とでもするか。

梅志—この句はこのままで頂ける。ある女の気持がよく分かる。恐らく彼女は教養のある夫へ嫁す事が理想だったのでしよう。然るに夫の教養は彼女を悲しませる日を招きました。そしてその悲しみは夫の教養を諷う点にまで達した。表面は幸福のようであり乍ら実は幸福ではない。人生の矛盾に彼女は悩まされている。かすかなユーモアもあり、ちよつと彼女の将来を考えさせる句です。

六花—世の中は教養と地位は必ずしも平行はしません。此の女の理想と現実をついでいるに過ぎず、このままでは頂きかねます。

上五を地位が何かに置き換えて見たら、実感がもつと強くなったのではなからうかと思ふのですが如何でしよう。

侃流洞—川柳の味が非常によく出ている句だとは思ひます。然し私としては「独りの夜が続き」では迫力に欠けるのではないかと思ひます。表現にもう一步の考慮があつて欲しいと思ひます。

無鬼—作者は私達の支部の優秀作家の一人ですが、句主を代表する程の句ではない。

同君のはもつと優れた句が沢山あります。併しこの句はこれでよいのだと思ひます。作者の調子が出ています。

梅志—お説の通りでしょね。ただ付け加えたいのは、此の句は教養で生かされているので、他のものでは句になりません。従つて上下の筋はよく通つているが如何にも弱い感じがする。素材も古いのですが、然し精進の後は見えています。更に作者の精進を祈りましよう。

六花—「独りの夜が続き」が古い表現でもあり一寸鼻につきませんか。

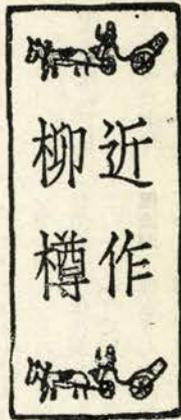
美笑—私は始めから佳句とは言つて居りませんが、どことはなく目を引かれる句であつて、人生活のすべてが思ふようにゆかない所をまずまずと言つた処でしよう。

(本稿担当眞鍋一瓢)

飛燕往来  
池田正三氏(パリ便り)  
—句集「私達」の装幀者—  
—原主後記

前略、出発の際は心からなる御歡送を賜り厚く御礼申し上げます。先生の御健康はその後如何ですか。御無理をなさいませぬよう。私もやつとパリの生活にじまられて、毎日元気にルーヴルのはじめ画廊巡りをしたり、天気の良い日にはセーヌ河畔に腰をおろして、いろいろ考へたりしています。先日十日間程スペインへ行って参りました。闘牛、フラメンコもさることながら、マドリーのブロード美術館の素晴らしいその近くのトレドの鄙びたスペイン風景に酔つて帰りました。物価高で弱つています。安いのには地下鉄とブド酒だけです。では又。

みんなの暮しが明るくなる  
セキスイのプラスチック  
積水化学  
本社 大阪市北区宗道町1



麻生路郎選  
北川春巢選

病状は遅々光陰は矢の如し笠岡市 出原 真奇  
 義理で聞くべトトウヴェントウヴェン 同  
 真つすぐに歩いて居れば突き当り 同  
 とばかりが貴方もそう此方へ来 同  
 子の寝ざまアクセサリト云う枕 同  
 俎に載る日の朝は聖書読む 同  
 死んだ父帰って来そう俄か雨 同  
 ソツの無い男を蔭で看にし同山市 宗高矢寸志  
 燈明を上げる時だけ腰が伸び 同  
 切口上のハガキを五行程に書き 同  
 不用心な我が家風鈴ばかり鳴り 同  
 女同志デパートを散歩して帰り 同  
 目に触れし妻の下着は哀れなり 同  
 どの党も味方にならぬ松葉杖玉野市 伊原 明林  
 公明選挙標語ばかりが進歩する 同  
 メートル法やっぱり尺で念を押し 同  
 煙草喫いながらどちらも麦をほめ 同

二号からの電話事務室シンとさせ 同  
 粉骨碎身麻雀で夜を明し 同  
 電報をうって呼ぶほど来ないひと大阪市 板東千代美  
 人形を抱けば人形の腫も曇り 同  
 サンデー晴ウールに初夏の風を吸い 同  
 本当のことが言えたら死もたのし 同  
 三の糸下げたら恋の唄になり 同  
 派手に着て派手に暮してまだ嫁かぎ 同  
 藤本幸永さんを悼む 二句  
 桃咲いた日の顔色を褒めたの岸和田市 内藤きさ子  
 全快の祝賀のプランたてたまま 同  
 クリーナーに吸われて昼こそばが 同  
 真剣な話惚気も真剣に 同  
 月見草クラスメイトも老けたらう 同  
 タクシーで帰える生家が小さすぎ同山市 福田白面子  
 履歴書を送ってみよと頼りなし 同  
 若旦那帳場で野球聴いて居る 同  
 むちゃくちゃに拍手僕を委員にし 同  
 禁煙の三日の記録までは持ち 同  
 三男はすねて自衛隊へ行き同山市 高木 桃里  
 老衰で死んだ通夜の灯があかい 同  
 挨拶へ幹事は不参の数を読み 同  
 祝友人退院 二句  
 全快の顔で手術の跡を見せ 同  
 全快へ妻は見守る位置につき 同  
 婚礼も葬儀も代理でない候補兵庫県 永尾 永断



婦人友の会からおくつた菊を喜んで飾っておられる幸永さんです

藤本幸永さんを  
悼む

丸尾潮花

幸永さんが亡くなられましたと一  
 球君より聞かされたのは、婦人  
 友の会三周年記念の川柳大会を二  
 日前に控えた夕暮れだった、病状  
 が悪化しましたとお知らせをう  
 けてから二十日あまり。どんなに  
 悪くなられても大会が済む迄はが  
 ん張って下さいと心に折りつづけ  
 ていたのに、その大会を待ち切れ  
 ずに逝ってしまった。白いベツ  
 ドの上で川柳を作ることだけを唯一  
 つの心のよりどころとされていた幸  
 永さん、羽曳野病院の三病棟の階  
 上の個室で温い南の陽を一杯にう  
 けて、いつも美しい四季の花を活  
 けていられた。  
 ベッドから眼の届く位置にある  
 壁には渡乃先生や春巢さん、をし  
 て私の短冊が掛けられてあった。



メーデーの日当パチンコ屋へ運び  
電気釜主人が朝の飯を炊き  
奥さんの稼ぎで夜を飲み歩き

柳友須賀太君結婚

川柳もする約束で来て貰い

五月晴出不精の母は誘われる 宇都市

薫風が執達吏真面目に街を折れ

壁の疵住職老いたなと想い

鯉轍三男朝から出たきり

うどの酢ものに祭は朝から雨

新築の庁舎大工も花をつけ 岡山県

木の芽和え頼んで朝を田に出かけ

お向いは夫婦夜汽車を独り飲み

喜んでよいのか酒の量が減り

姉の子を魔除けに連れて街へ出る 鳥取県

わめく子へ心を鬼に麦を刈る

教え子が天晴レストの闘士なり

遊んでるようでも梨は花ざかり

湯につかり心に嘘のない呼吸 大阪府

看護婦がけむたく見える程に癒え

ゴールドデンウイークが素通 山梨県

女事務綺麗な方をよう使い

全女性御愛用妻薄く塗り 小松市

足向けて寝ませぬなどとそれっ

本店は間借りのビルに社旗を立て

スポンサーに申訳なく胃も丈夫

同 同 同

上林 粗影

同 同 同

太田 蓑流

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

小事みな告げて大事はかくしとき 京都市  
連続のドラマの合間に市場ゆき  
通勤のこのまま旅に出たい空  
家計簿へ連休雨であって欲し  
かりがりに瘦せていながら雲丹が好き 豊中市

良縁が次から次で嫁きおくれ

勤続三十年昼寝が出来る様になり

父の顔思い出し出し灸をすえ

大ジョッキよくぞ男に生れけり 熊本県

庭の草伸びるにまかせ貧のうた

サイレンが鳴って議長も腹が減り

十円で子を追い出して大掃除

風船につられカレー粉買うてくる 堺市

昼寝していたらボールに見舞わも

おしっこも言えぬに流行語 だけ 喋り

奥津温泉にて

奥津なつかし洗濯ダンス見て戻り

人間で有る悲しさつい腹を立て 西宮市

手にまめもない淋しさで病み続け

退院

お茶碗でおかわりするも二年ぶり

精農に問えば努力とあっけなし 笠岡市

見て居った程に酪農儲らず

口程に目は欲待をして呉れず

不景気な話へ金策切り出せず 和歌山市

捨てられてからはコケシにうっせ

都倉 求女 (前後改)

同 同 同

林 園男

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

**ヒゲツリ後に**  
アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲツリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

**明色アストリンゼン**  
桃谷順天館

お見舞に貰われたのであろう可愛  
い人形が丸い眼をして行儀よく並  
んでいた。体の許す限りを友の会  
の方と見舞ってあげることにして  
いた。そして其の都度わずかな面  
会時間を無駄にしない様に川柳に  
対しての質問や友の会の方々の近  
況などを始終はほ笑み乍ら聞かれ  
た。私が最後にお見舞をした時は  
大変お顔の色もよく、かえって路  
郎先生の御休のことや私の健康な  
どを心配して下さったり、潮花さ  
んが若芽さんのお部屋で川柳の講  
義をしていられる間、私は、きさ  
子さんや美喜さんと、潮花さんの  
悪口を言い乍らお待ちしています  
と笑い乍ら、しよう談を言われる  
位に御気分もい様だった。五月  
月の大会が済むまではよう米ませ  
んが元気で待っていて下さいなど  
と言ってお別れして来ただけに、



一斤をグラムに直すややしき 同  
 お隣りは銀行うちは質屋行き 岸和田市 中野三四郎  
 宵寝する口実くさめ二つ三つ 同  
 血色の良い童顔で長寿法 同  
 俺と同じ高小卒へ票をやり 笠岡市 木山桃仙坊  
 パチンコを止めれば女にすらすら来 同  
 肘鉄を食わして通勤車をずらし 同  
 招待券ジャズへ不満の母も行き 大阪市 橋本 雅巢  
 倦怠期背中合せてドラマ聞く 同  
 アベックヘチエツと舌打して孤独 同  
 爪切って逢う決心がきまりかけ 西宮市 富永 夢路  
 テント村朝餉の煙真直に 同  
 うしろ向きに歩きたい程見送られ 同  
 親馬鹿がここにも居ます鯉のぼり 若松市 三上 春雄  
 どっちにも似ぬ幸運な子が生れ 同  
 二次会は予定通りの顔になり 同  
 感謝した妻へ退院もう怒り 平田市 石橋万古人  
 ヘソクリを俺よりコン泥知って ト 同  
 乗換えの善男善女かましい ト 同  
 漫才を聴いて宿直寝ると決め 宇部市 神田 豊年  
 人間の欲が無料へ押し寄せる 同  
 珍しい日和へ妻の愚痴を聞き 同  
 バックミラー美人とらえた 西宮市 村上 球絵  
 会葬の帰り故人の過去にふれ 同  
 哲学を学べば母は心配し 同  
 もうばあちゃんでおあい 水見市 関 す頭女

母の日の母克明に写生される 同  
 快晴なり快晴なり葱枯れかかり 同  
 婦人誌でまず子の発熱を診断し 美濃市 安平次弘道  
 鯉のぼりもおむつも五月の風を受 ト 同  
 何よりもおむつが乾く五月晴 同  
 治る気で持病は薬飲んどらず 笠岡市 木山 遠二  
 借金は殖え親類は減ってゆく 同  
 流行歌合唱仲のよい親子 同  
 死みやげなどと米寿のロカビリー 大阪市 米浪進之助  
 モーニングと晴着を脱ぎ家族風呂 同  
 高血圧など清貧で気にもせず 同  
 スタンドで女社長にされて飲み 大阪市 竹内花代子  
 死んでから川へ放してやる金魚 同  
 喰べたあと高い高いは妻の愚痴 同  
 五月晴一人占めた部屋へ蜂 奈良県 坂東 若芽  
 さみしさはラジオ大きくかけて寝る 同  
 鼻が安心せよと啼いてくれ 同  
 死神よさらばさらばと試歩の足 岸和田市 植山 武助  
 政権がどちらへ行っても火の車 同  
 楽あれば苦あり独身時を想う 同  
 陰口と知らず笑顔でやって来る 玉野市 則田水鏡子  
 バラの門叩けばアイと答えそう 同  
 道よけてくれて哀しい霊柩車 同  
 末筆の祖母へが祖母を喜ばせ 笠岡市 佐内 隆文  
 恋人の拍手汗の目見逃がさず 同  
 一服の煙草で吐を練りなおし 同

お知らせ  
 バックナンバー御入用の方は、  
 往復ハガキでお問合せ下さい。  
 川柳雑誌社

今もまだ、花代子や、きさ子さん  
 美喜さん達が言われるように南の  
 陽をうけた明るい部屋で静養し乍  
 ら退院の日を待っていられるとし  
 か思えない。

友の会百余名の心からなる黙禱  
 の中に、護乃先生より授ける金泥  
 集三位入賞の慶びも知らずに逝っ  
 てしまわれた幸永さん、細いところ  
 ろにまでよく気を使われた幸永さ  
 さん、川柳に生き、川柳に死んでし  
 まわれた幸永さん。金泥集句集が  
 刊行されたら、句集の中でいつま  
 でも私達川柳人の心の中に生て残  
 る幸永さんの冥福を祈る。

生きている生きて待ってて呉れ  
 そうな 潮花  
 桃咲いた日の顔色を褒めたのに  
 息い出がみんな涙になって落ち  
 きさ子 花代子

○ 一個の投石

佐内 隆文

私の内の親類先きに、木山緑々  
 菁という一川柳人が居りました。  
 家では妻に農耕の傍ら、桃柿梨な





解決へ心の疵はまだ癒えず  
神経質だなど石ころに見透かされ 松江市

文楽座にて

絶叫の太夫へ血圧気にかかり 布施市

薫風へ素足が白い裾さばき

帽子一つ買うのに妻を連れてくる 大阪市

出張の証拠のみやげ買ってくる

なやましの素足にゆうとすましとり 河内長野市

建てあがって見れば張りぼて見 見

遊園地ごみを集める人に会い 大阪市

商魂は牛乳箱へこんにちわ

感違いして恥かしい初対面 岡山県

貰い子をせよと婦人科言い添える

男でなければと言う力借りにゆき 山口県

活け換えたその手で手紙したため 小松市

すき焼の匂いへ洗う手がせわし

駄々子のように大人のトルコ風呂

早植は近所隣りをせき立てる 岡山県

碁仇がやって来そうな雨になり

お隣りが新婚夫婦で若がえり 名古屋府

お隣りが選挙事務所で派手になり

聞き捨ててくれと気まずい 貝塚市

同業の腹さぐり合う懇談会

仕送りの無学の兄に励まされ 西宮市

とまってる蠅を見ている倦怠期

同  
岡崎 祥月

久米奈良子

同

河井 庸佑

同

森本黒天子

同

小島さぎす

同

杉田 明美

同

前野 美保

同

万仲 一進

同

杉本たつよ

同

細川 千草

同

小林守株漢

同

御園生 江

同

素人の鋸バカにするベニヤ板 大阪市

魔法瓶寛の水をみやげにし

針箱に消ゴム探がす子沢山 大阪市

あらそうと知らぬが仏になってき

紅一点だけが静かにフオーク取り 伊丹市

總會へ百姓背広ガニ股で

頼母子のつもり香爰出すと決め 広島県

思想とは別に恩給証書が来

大声で呼んで耳打ちする秘密 西宮市

賛成はしたが力はよう貸さず

あなどっていた迷信に助けられ 貝塚市

嫌いだと云えず許嫁がありますの

老いて子に従い孫をあてがわれ 滋賀県

あり余る程は持てない運と知る

嫁きおくれ同士拗ねるにうま 鳥取市

ひからびてどもカメラにポーズ見 見

橋筋は橋筋なりのおそばの値 大阪市

新妻のエプロン白う手も白う

充分に酔うた酔うたは酔わぬ口 八代市

頼つてた手相が自動車事故で死に

泣き面に蜂証人で呼び出され 広島県

煮き方も教えて冷凍魚を売り

女事務すねて配った茶が熱い 今治市

改造の喫茶思い出消えてゆき

同  
藤富 淀月

同

吉川 悦子

同

小川静観堂

同

山内 俊見

同

中橋川太郎

同

護川 梢月

同

高田穂波子

同

西岡 洛醉

同

永松 道雄

同

杉原 愛鳩

同

越智 義夫

同

傍鳥 静馬

川柳雑誌社特製  
投句用 柳 箋  
一冊(五〇枚綴)三〇〇円  
送料(一冊分)八 円

の当時の雑誌などに発表していたらしい。今私の知る一句に「火を借りた礼にきせるを一寸と上げ」がある、が此の一句によって故人の人となりを知り、ユーモア的な面影が今も尙彷彿として顔前に浮かび、言い知れぬ親しみを覚えるのである。英国の大歴史家にアクトン郷という人があった。一八三四年に生まれ六八才で死んだが、彼は名流の子として生まれ、恵まれた生活をし、書齋にはおよそ七万巻の書物が整然と並び、その一冊一巻皆彼の手垢がついていたというのである。彼の無尽蔵な知識には何人も驚いたが、政治家としては遂に何事もせず、歴史家としても何等の作品も遺さずに死んだ。砂漠が雨水を吸うように、知識を吸収しつつ、遂に一流の清泉をも地上に噴出することが出来なかつたのである。空しい篤学者であつたとの諷刺は免れまい。  
私達もそれ相様に、知識を今日まで貯えて来た筈である。文芸方面に於ても労働者階級だから、大作は出せなくとも緑々善の如く、短詩文芸にでも一流の泉を作ろうではないか。そしてそれによって



連休の疲れ机で大欠伸 <small>大阪府</small>	馬鹿でない証拠の様に怒って来	あくびしたところを見ても興が醒め <small>兵庫縣</small>	風向の方になびいて海苔乾く	連休を大工をさせる妻であり <small>熊本縣</small>	夢のない友を励ます酒を買い	末子の秘密の箱で虫が鳴き <small>小松市</small>	来年も着せるサイズがもう破れ	予防注射いらない齡になつて来た <small>兵庫縣</small>	新婚の侍せそうな窓明り	逢引の電話の暗号うち合せ <small>ハワイ</small>	平和をば戦い取れと委員長 <small>津島市</small>	母の日に母を泣かせる娘の便り <small>玉野市</small>	仲人ばかりして吾が娘を忘れ <small>金沢市</small>	君見給え吊皮のラインダンス <small>秋方市</small>	恋愛も神前式でちょつと照れ <small>大阪府</small>	念に念入れて刺る髭ひやかされ <small>大阪府</small>	里へ行く五十の妻に母が居り <small>広島縣</small>	立って見送りうれしい旅に発ち <small>京都府</small>	よい人を選べと選管無理を云い <small>笠岡市</small>	薄着して春の香りを吸って見る <small>山形縣</small>	骨壺へ納めて孫の手に託し <small>普通寺市</small>	ハイテーン <small>ちんちん</small> やらズボン穿 <small>大阪府</small>	逢引を知らずに妻は送り出し <small>奈良縣</small>	定年へ年金法が待ち遠し <small>七尾市</small>	救命具付けりや拳闘型もする <small>愛媛縣</small>
島田 雄峯	同	遠山 一雨	同	淵川 秀敏	同	関戸宗太郎	同	河原みのる	同	宮政 周防	堀田 淳一	小谷 仙山	山田 圭都	宮川 珠笑	村田 肇	中西兼治郎	松井 可笑	塚脇 笑太	谷本鈍愚坊	菊地 白葩	橋 十四呂	仲谷ハナ子	木村よしを	松高 秀三	河本南牛子
禁酒は出来ず電灯一つ消し <small>石川縣</small>	夜動手当疲労をいやす程もなく <small>大阪府</small>	年ごろに男ざらいが気をもませ <small>徳島縣</small>	天婦羅の署長 大学出に訓辞 <small>西宮市</small>	七七日までには神妙に掌を合わせ <small>大阪府</small>	服作る夢ははるかな部分縫い <small>天理市</small>	ばかなこと云うてて苦勞ない <small>岡山縣</small>	建付けの悪い障子も埋立地 <small>宇都市</small>	再婚が鏡台一つで又戻り <small>大阪府</small>	淡雪はドブ温める間のいのち <small>福岡縣</small>	農地解放村にテレビの数がふえ <small>兵庫縣</small>	素顔ではピエロ立派な紳士なり <small>大阪府</small>	街の子に木登りさせたい分教場 <small>見島市</small>	憂うつな顔してクイズ考える <small>大阪府</small>	食堂を工事の足場からのぞき <small>見島市</small>	横綱もメートル法で土俵入り <small>西宮市</small>	ブリキ屋が切れれば紙切るように切 <small>大洲市</small>	井戸端ではばきかして居る嫁 <small>兵庫縣</small>	白粉に惹きすられつつ灘が空き <small>西宮市</small>	表彰を受けてその年 誠首され <small>玉島市</small>	母の日に手持ぶさたで母嬉し <small>西宮市</small>	箔つける積りの嘘で箔がはげ <small>堺市</small>	陰口はもう聞きあきた太りよう <small>大竹市</small>	弁当箱の音する鞆のさびしけれ <small>西宮市</small>	土の香を気兼し二等車乗っている <small>加賀市</small>	金よりも健康やっぱり金も欲し <small>鳥取縣</small>
高瀬 幸路	中田 洛風	小阪美栄子	酒井 丹謠	近藤 高史	仲野花鶴美	福田 祥男	鎮浪 翠月	安並 十七	阿部たけし	斉藤たけお	萬代句念坊	鎌田 銀子	西本 保夫	伊丹柳瓢子	樋口 寿栄	富永 建朗	藤本ゆたか	塚田 東雲	井上 旭峯	三上 芙路	武田軍治郎	志水 一角	村上 道草	斎藤 無山	土江 基保

**味の七-J**

モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻東へ

**御 門**

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



日常生活を豊かにして行こう。先輩々々の投じた一個の石が波紋を描き、今や身近かな処では作家木山捷平氏を生み、又翌後二・三の人々により伝承された川柳が種となり、現在我々に並木会なる十数名による、川柳グループを作っているのである。世にはゴビの砂漠のように多くの知識を吸収しながら、一流の清泉とも言うべき短歌の一首も、川柳或は俳句の一句も、コントの一篇も創作せずに死んで行く人々が多い。然し人間として生まれ、貴重な五十年の生涯に於て、一行の戒名を墓石に刻み残す以外に、川柳の一句でも後世に遺して往生したいものである。この一句によつて如何に多くの後輩が、人間的な故人の面影を微笑みながら偲び、感化裨益されること大なるものがある。

# 夏すがた 茶気チャキ展

— 大阪ゆう・もあくらぶ主催 —



そごう百貨店二階茶気チャキ展で  
麻生路郎主幹 (牧村史陽氏撮影)

5月23日から28日まで(29日は  
誤り、当日は休店日)そごう百貨  
店二階ギャラリーで開かれた、大  
阪ゆう・もあくらぶ主催の茶気チ  
ャキ展は、さすがに各界の名士を  
すくって出品された。ゆかたコン  
クールだけに、その斬新にして  
奇抜、風流にしてモダンな図柄は  
男性にも女性にも大受けだったこ  
とは成功であった。

ゆかたの藍の匂いは初夏の香り  
である、夕刊とビールと浴衣は、  
日本人だけが味わう夏の饗宴でも  
ある。

カットの写真は、日一日と快方  
へ向う路郎主幹の近影であるが、  
ご覧のとおりこのように元気にな  
られたことを、ちよっとご報告し  
ておきましょう。

写真向って右端のゆかたは、芸  
能陣の巨笑花菱アチャコ氏の作品

である。

「うまいもんやなア」と、米会者  
が目をみはるが、人ぞ知るアチャ  
コ氏の令息、藤木功重氏は新進画  
家であり、この子にしてこの親あ  
りという子譲りの絵ころろが、こ  
の傑作を生んだのである。

そのとなりが大坂テレビ編成局  
長原清氏の作品である。画題は海  
水浴——ビーチ・パラソルをあし  
らった逸品である。

次は路郎主幹の作品で、題し  
て——恋は果しなく続く……。  
マジックインキで描いたペン先  
が果しなくつづいている。詩人  
らしい感覚に若さがあふれるも  
の……。紺地に白抜きのパン先。  
主幹のこの筆致は、本誌でみる句  
や原稿のイノージにつらなるもの  
を感じたが、これは私だけのもの  
であろうか。

さて、その左端は講談界の大御  
所、旭堂南陵師の「太閤記」であ  
る。

路郎主幹がペン先を、南陵師が  
太閤記を画材にしたことは、いか  
に両大家が、その「天職」に愛情  
をそそがれているかがうかがえる  
ようである。太閤記といえは千成  
瓢箪(びょうたん)であるが、や  
はり大阪人には千成瓢箪はなつか  
しい。

カットの撮影者は、郷土史家牧  
村史陽氏である。氏の作品は「四  
十八手」と題された「八つ手」だ

が、そのアイデアは現代女性にピ  
ツタリという評判だった。

夏の夜のそぞろ歩きに、心アラ  
マンのこれらのゆかたを着たア  
ベックに会うのも楽しいものであ  
る。

(一三夫)

## 恋は果しなく

続く……

久米奈良子

天神さまへお詣りしての帰え  
り、そごうの茶気チャキ展を見せ  
ていただきました。書道に生涯を  
ささげようとする私には、こうし  
た催しものはできるかぎり拝見  
して身につけたいとねがっております。

今春の短詩文学作品展といい、  
このゆかた展といい、本年はホン  
トに恵まれた多くの催しものに感  
謝いたしております。

心音橋筋はもう初夏のすがすが  
しさでした。飾り窓の夏すがたも  
清楚な感じでした。そこへゆかた  
展と効果百パーセントの企画だと  
思いました。それに図柄の考案者  
が、ゆう・もあくらぶのおレキレ  
キときているので、まったく気の  
利いた逸品ぞろいでした。

中でもやはり路郎先生の、  
——恋は果しなく続く……は傑作  
でございました。紺地にペン先の  
図案はとて素敵でした。私に  
は、ちよっと地味のようにでした

和 洋 菓 子

朝 日 堂

大阪南区市電戎橋御堂筋角  
TEL (75) 7284

が、赤か、黄か、それとも白か、  
いずれの帯を締めても良いと思  
いました。

フト、そんな浴衣すがたの私を  
まぶたに描いてみました。こうし  
た夢にひたることは女の特権とい  
うものでございませうか。路郎  
先生のペン先の柄が欲しかったの  
ですが、あいにくアレを用意せず  
に出ていましたので残念ながら買  
えませんでした。

牧村史陽氏の「四十八手」とい  
う八つ手の柄も気に入りました。  
あっさりして、なんとも言えない  
快よさを感じました。  
夏とゆかた——よくぞ日本に生  
れける。  
(五月三十一日)



(左から吉田華香、韻乃、瀧花顔氏)

# 追悼花会と川柳

## 丸尾潮花

五月十一日、住吉生根神社花菱亭に於て、村山和甫さん(柳名静修)の令妹和子さんの十三回忌花会を催されるに当って、婦人友の追善の花会が一層賑かになると思いますがとの懇請に会長段乃先生に御同意を頂き、短冊の揮毫には梅里さんをわずらわせ、友の会新春句会段乃先生選、課題「活け花」の句から八句を選び、和甫さんとも御懇意の梨花さんも出句して頂くことにした。当日は雨天だったが段乃先生を始め、良子さん、奈良子さん、史子さん、花代子達がお会場に入った。川柳婦人友の会共賛の貼紙が目につく。

茶華道の人々に依って花菱亭の座敷は埋められ、丹念に一句、一句をノートされていく方も見受けられる、ほおえましい情景に接した好みに依って生けられた流儀、盛花の色彩の中に並べられた五色の短冊が人眼を引く、季節柄、燕子花の花が多く活けられ、姫百合、芍薬、紅葉、カーネーション、バラ、乙女百合の姿も可憐である。会場に近く並べられた。阿茶さんの「またこてが来た」と花屋は獲って出し」の句に軽い笑いを誘われる。「流儀とは別に盛花活けて待ち」花代子の句がそれに続き、梨花さんの「花活けて春の姿の部屋となり」「奥様のセンス

で枝が切り取られ一葉乙女。こうした句を前にして中島時甫さんの、夏ハゼ、芍薬、紫陽花が派手に眼に映る。亡き叔母さんへの供花として、村山慶子さん(9才)村山洋子さん(8才)が活けられた花籠のカーネーションの花が胸を突く、操子さんの「活け花の梅咲き初めて位置を替え」一栄さんの「老松へ根じめのバラが優しすぎ」「一枝は戴きものの梅の花」沙智子。時機のずれがあるだけに冬の花を主としたものになってしまったことは惜しかったが初めての試みとしては好評だったと思う。師範の方々の花は別として、山内水美甫さん、三浦玲甫さんと言う若い人々の心尽しの供花が川柳人としての私達の心の底を温められる思いがした。吉田隆甫さんの供花紅葉は段乃先生には特別にお氣に召された様であった。佐々木初甫さん、吉田隆甫さん、山内水美甫さん西本加代甫さんのいずれもが舟にカキツバタを活けていられたが川柳と同じ様に一人々々個性が出ていて変わった感じをあたえられた。丁度川柳人が同じ課題で作句してもその人の個性によって生れて来る句が違うように。当日段乃先生に御出句頂いた「この辺に野だての釜のほしい芝」の名句は上座に友の会を代表された様に輝いていた。お茶室を出た段乃先生と私は、師匠吉田華香さんに花道から見た川柳についての御

意見を伺った。川柳はその物ズバリで大変私達にとりまして痛い処を突いて頂き参考になりました。たとえば「半分は師匠の活けた花になり」史子。などの句は、本当に皆さんがおっしゃる通りなのです。「木仙を活けて水仙匂う部屋」さき子。こうした句には又何とも言えない描写の美しさが見られますし、梅里さんの「花鉢だけが立派な未生流」などとても痛いところを押えられていくようで、と始終微笑み乍ら感想をのべて下さる。此の句は決して未生流を皮肉っているものでなく、習い初めと言うものは、立派過ぎるほどの花鉢や舞い扇を持ちたがるものである。

吉田華香さんは茶道にも明るく、生花に対しても茶道の名で押していられるそうである。村山和甫さんから色々と華香さんのお人柄をきき一般の生花の会に就いて承って見たが、一般の花会と言うものは史子さんの句のように半分どころではなく全部を師範の手によって活けられ、花会当日出席して見なければ自分の花がどれかわからない。師範が活けて名

札を此の娘の年数ならこの位いたと言う様に名札を置いてゆく。たとどの花も同じなんです。しかし華香さんは、人様に見て戴くものは下手でも自分で活ける様にさせていられますので此の花会の花は全部一人一人が活けられたものです。

生花も自然が花の心であり、ためると言うことは虚であると語され生花は実と虚であり、世の中は実ばかりではない。虚と言うものがあって和が生れて来ますなどと色々話して頂いた。すべての人に夢があり空想があり嘘があつてこそ人は生きて行く希望をいつ迄も持ちつづけていくのである。令妹和子さんを偲ばれる追悼の花会に友の会として句を供えること出来たことは川柳への一歩前進であったと言えよう。

妹がそばにいそうな花鉢  
潮花

あなたの生活にプラス  
近鉄のお買物

アベノ上六  
近鉄  
アベノ上六 店 8331  
アベノ上六 店 3131



# 源頼朝 (五)

## 富士野鞍馬

### 西行に銀の猫を贈る

静御前が頼朝の前で舞を舞

った年、文治二年(一一八六)

八月、西行法師は、東大寺勅

進のため東国へ下る途、鎌倉

に立寄った。丁度頼朝が鶴ヶ

岡八幡へ参詣するのに出会

い、頼朝に迎えられ、武道、歌

道を尋ねられて、その礼に、

銀製の猫の香炉を贈られた。

ところが西行は、そんなも

のは要らないといって、表へ

出て、そこらに遊んでいた子

供に与えて飄然と立去った。

白銀は猫黄金をば鶴へ付け

(タル三二)

銀の猫鶴から見ればかるい事

(万安四)

その銀の猫を千羽鶴の金短

冊と比べて詠まれている。

しろかねの猫真つ黒な手で貰

ひ (タル六〇)

その猫を鼠衣の袖へ入れ

西行は佐藤義清という武士  
であった。

其の猫をくれさつせいと村子  
供 (タル四一)

世をすてる外に猫まですてた  
まひ (タ三二)

その銀の猫は、子供に与え  
て立ち去ったのであった。

### 大頭

川柳では、頼朝を大頭とさ  
れている。「平家物語」には

「頭大きにして背低かりけり」  
とあり、京都高尾、神護寺に

ある本像を見ても、そう大頭  
とは見えないが、とにかく、

江戸巷間では大頭とされてい  
て、それが、いろいろのもの

に比喩されている。

大あたま初手は平家に居候  
(タル七九)

大あたまこれぞ武将のはじめ  
なり (タ五〇)

頼朝の偉大なことを「大頭」  
といったのかも知れないが、

頼朝の寝がへり枕おつつぶし  
(タル三六)

おつわりと下はちがふと政子  
いい (タ八二)

政子御前の迷惑な膝まくら  
(タ四二)

は、正に頭の大きいことを詠  
んでいる。

頼朝の兜拝領してこまり  
(タル三二)

頼朝の兜質屋の火鉢ほど  
(タ一五五)

拝領の頭巾梶原ぬひちぢめ  
(タ五九・七二)

などと、誇張した句もある。

富士を枕に大あたまねらふ也  
(タル百)

大あたま冠って舎弟蝦夷へ落  
ち (タ九九)

と、曾我兄弟と、義経を対照  
にした句もあり、

大あたま鳥けだものに金を入  
れ (万安七)

富士の牧狩と千羽鶴も詠まれ  
ている。

清正をさし頼朝をはいて出る  
(タル一〇八)

大間の印頼朝の下駄へ打ち  
(タ八九・九三)

有名だった、新和泉町の外  
法下駄を、外法の頭が大きい  
ので、それを頼朝と洒落てい  
る。

頼朝は頭匂弓削は大尾也  
(タル九二)

湯屋の頼朝をお乳母は付ねら  
ひ (タ九六)

湯屋の評判頼朝公御入り  
(タ一一九)

などと、末番句もある。

### 芝居

頼朝を棧敷で後家はつけねら  
い (タル五三)

これは、芝居に出てくる頼  
朝であるが、末番のにおいも  
する。

村芝居頼朝さまあ庄屋の子  
(タル五九)

ということになったである  
う。

よきに計らへで頼朝役がすみ  
(タル十四)

芝居の殿様役は、大ていこ  
ういうものである。

誉め言葉頼朝公に手をつかせ  
(タル五八)

「誉め言葉」というのは、趣



向を凝らした客数人が花道へ立って、割台詞のようなことを喋って、俳優をほめるのであって、その時俳優は演技を中止してみな舞台で平伏したものである。

頼朝はてれつくんで出はいりし (拾九)

まず頼朝になるのは、あまりよい役者ではなく、楽屋では頼朝公の部屋はなし

(拾九) 十四歳で伊豆に流され、治承四年(一一八〇)三十四歳で石橋山に旗挙げして、建久三年(一一九二)四十六歳で、全国を平定して、鎌倉に幕府を開き、征夷大將軍となり、武家政治の元祖となった。そして、建久十年(一一九九)一月五十三歳で死んだのである。

景清の内に頼朝居さうろう (タル三五)

景清とか五郎とかは、立者の役で、頼朝役は弟子格であったことであろう。

あまりほめられてはいない。

頼朝は、永暦元年(一一一六)

その死を「吾妻鏡」には明らかに書いてないが、前年十二月二十七日に、稲毛重成が、亡妻追福のためにかけた相模川の橋供養に臨み、その帰り、稲村ヶ崎辺で落馬したのがもとで、病を得てなくなつたと伝えられている。

長子頼家が二代將軍となつたが、十八歳であるので、母の政子は尼になって、その父北条時政等を顧問として、政治を見たのであった。

# 同舟近詠

松山市 前田 伍健

流し屋の仁義のれんへ声を掛け  
孤独好きお金も持っておりません  
許すなど大仰に言う夫婦もめ  
女とはこんな正体相談所

大阪市 麻生 霞乃

子もアブレ親もアブレで応戦し  
事務日記で終る日記の淋しけれ  
岩風呂がばちなつて来ちよん一人来

奈良みどりかいこが夢を見るところ

大阪市 橋本 緑雨

バラをくぐつて行って来ます行々来  
良い香り胸に一輪さしていい  
バラの家二階をみると戸が締り

須坂市 高峰 柳児

拇印押す弱身汚れた手のやりば  
慰籍料になる繻帯を派手にする  
手内職夫の不甲斐なさに馴れ

和歌山市 秋月 宏方

テレビまだ我が家の予算には組めず  
冷蔵庫ビールはここで待機する  
春眠を起す目覚し罪な役

今治市 長野 文庫

来年の暦はすでに蔵に在り  
つきあい積り新聞六七種  
私大出の前に立ふさがる内規

大洲市 米沢 暁明

宝物は大いにいにして鹿へ寄り  
今治市 月原 宵明

労組のかつての闘士位置を替え  
サンデーを見い見席が空かないか  
ハンサムと言うも引きに似たを穿き  
月見草横で土工のお湯が沸き

(七四〇) 鎌倉のたねのはびこる薩摩芋 (七四二)

という川柳があるが、薩摩島津八十六万石は、頼朝の後裔といわれている。江戸時代、加賀百万石の次の大名であったから、これも大頭である。しろくろの毛は東西の大頭 (万安八)

島津の始祖忠久は、頼朝の愛妾丹波の局の子で、正室政子の嫉妬をおそれ、近衛家に養われ、後日向、大隅、薩摩の守護、地頭になったということである。 (次回作 源頼家・実朝)

(タル一四一)

ところが、二代頼家は内紛で殺され、弟実朝が三代になったが、それも殺され、遂に源氏は亡び、北条氏の世となった。それから間もなく、政子も嘉祿元年(一二二五)六十九歳でなくなつた。政子

北条氏——は平氏の流れであることは、奇しき運命である。

後裔 (タル六)

御子孫は西の国でも大あたま

頼朝の落し種でも大あたま

## 神経痛疲労に

リウマチ・便秘・脚気・肺結核の補助療法にも

★新型ビタミンB1剤

アリナミン糖衣錠

30錠錠  
100錠錠  
300錠錠

大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社

## 朝

正本水客

六月の陽が初夏のように暑い。長女が何時の間にか年頃になっていて、妻のところへ縁談の話があったという。先方のお母さんは洋服店を手広くやっていたら、いいお話のようだと、大分乗気である。

が私としては、廿才までにまだ間があるし、母ひとり子ひとりというのは原則として避けた方がいいと昨夜反對論をとなえて置いたので、すこぶる御機嫌が悪い。むつりとして、いつになく、行っていらっしやいと云わない。私も黙って玄関を出た。靴は念入りに磨かれてピカピカ光っていた。

「けんかして居ても靴だけ磨いとき」

× × ×

赤字々々の続いた戦後の何年間から漸く抜け出して、一昨年は待望の大屋根を直して二階の大修理をやった。昨年は、次男、三男の勉強部屋にとバラックだが表庭へ一部屋建て増した。長らく失業して同居していた兄弟夫婦が、東京の病院に職があつて上京して行ったのは、この春のことである。長男は小鳥と犬とトロンボーンに一生懸命である、今せきせいが20羽ほどいるが、会社から帰ると遅くまでガリガリゴリと菓箱造りにかかり切っている、まだまだ教をぶやす心算らしい。トロンボーンの方は学校時代から始めて、甲子園の大会でファンファーレに出場したこともある。この間はバンドのアルパイトにゆくと、母親ともめていたようである。犬は純粹のシェパードだといふ小犬をビールのリベートで貰ってきたらしいが、長ずるに及んで段々耳が垂れてきた、そのかわり吠えるのと辺りに地響がして、知らない人は絶体で寄せつけないので用心はすこぶるいい、表の一坪ほどの所へ子供達の誰かが植えた花がいま美しい。

昨年、三回忌の法事をした母の面影が、まだ皆さんの胸に暖かく生きています。余り暑くならないうちに今日は

京都へ久振りにお墓参りに行こうと揃って食卓につく。

「ハムエツグ何不足なき朝の塩」

× × ×

春から夏に移り変わるうとする季節、草津高原を横ぎって万座温泉にたどりついた頃は、鶯の声もすつかり寝静まっていた。廊下を幾曲りして降りてゆく古めかしい浴場には、大きなランプの光りが湯煙りの上にたゆとうていた。

夜の明け方に眼ざめて窓を開けると、ギョッとする程の景観に思わず後じさった。白根山の爆発火口が鮮烈な水色と黄色に彩られて眼前に屹立している。余りにあざやかな色彩に押されて暫くは声も出なかった。

この色の鮮かさは未だに匂にすることができずにいる

× × ×

温泉宿の朝は、静かな中に何となくざわめいている。飲んで騒いで、麻雀の徹夜組も交って、とにかく神妙な顔を朝食の膳に揃えている。

皆んな物言いたげな様子で幹事の方を見るが、予算の関係もこれありと幹事はわざと濁して取り合わない。

と、一座の一人が立ち上って「百円会費でいきます」と百円ずつを即座に集めて回って、いたずらっぽく、にんまりと幹事の前へ置いた。

「朝飯へ一本欲しい顔並ぶ」

## 書

黒川紫香

晝とサラーリマン

風のブザーが鳴ると待ってた様にドヤドヤと地下にある社員食堂で、一食三十五円の定食にありつのが、我々サラーリマンの哀れな姿です。それをかき込む様にして僅か一時間の風休みを有効に使う。

散歩に出るもの、本屋で立読みに行くもの、中には

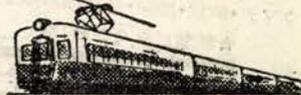
大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…

## 近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大阪一名古屋 2時間35分  
大阪一宇治山田 1時間54分  
名古屋一宇治山田 1時間34分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.40	16.40
8.40	17.40	9.00	18.00	9.40	18.40
11.40	19.40	12.00	20.00	12.40	20.40
13.40		14.00		14.40	



近畿日本鉄道

風飯と煙草銭を浮かそうと、はかなき望みをもってパチンコ屋へ飛び込み、風飯の何倍かをいかれてしもうて、帰ってからおあちやん(奥さんの事です)にまた小遣いをせびり出そうとする浅ましいのもいます。

屋飯を浮かすパチンコまたとれ  
屋上へ屋の外気を吸いに来る

たまに弁当箱を自分の机で広げて、一人静かに召し上っている人もあります。まず新婚さんですな、皆に羨れ乍らニタニタ笑いつつ食事をしてる姿は幸福そのものです。

「でも長つづきしません、まず一カ月か二カ月あんだお弁当持って行きはるより会社で食事しやはる方がよっぽど経済よ、お弁当って案外高くつくんですよ」  
てな調子で奥さんの面倒を棚上げして追い出されるのが落ちです。

腰弁も楽しく妻に見送られ

みみちいのになると、十円のパンを二個買って来て、もくもく喰べ乍ら新聞や雑誌(これもひとつのもの)をむしやぶる様に読んでる人がいます。家庭の経済に追われてる姿がありありと浮んでいます。でもこんな人は会社の生字引になる人です。

パン食で一人事務所の昼となり

豆茶にあたった話



風と言え、私がまだ土木関係の仕事をしていて、私が隊長となって六甲山を下から上迄三ヵ月程山暮しで三角測量をしていた時の事です。未だ戦争も起らない前の話で、六甲の中腹をトンネルでくり抜いて、中程からエレベーターで頂上迄車ごと上げてしまおうと言う其の頃ではとつてもない構想の下準備で、張切つて仕事をしていたものです。恐らく戦争がなければ実現していたかも知れません。

風になったので腰に下げて来た握り飯を山肌で腰を下して喰べたのですが、この味は又格別で、岩間を這う様にチョロチョロ流れる清水の旨さ冷たさは忘れる事が出来ません。この測量隊の一人に悪食家がいて、小魚やいなごをとつて来るのはまだいい方で、蛇をとつて来て焼いて喰べるのには皆閉口したものです。或る時この人がお茶を沸してくれたのですが山に生えている毒草を豆茶と間違えて飲まされました。暫くして全員が苦しみ出し、のた打っている所を登山の人に助けられた苦い経験があります。

水のあるところで弁当開きかけ  
何処やらで虫が鳴いてる山の昼

弁当が靴になった話

そうそんな話があります。まだ若い頃、五六人で楠公史蹟巡りをして天野山へ行った時の事、榎尾附近で昼にしようと適当な所を見つけてみんなが車座になって弁当を開いた所、その中の一人が、新聞でくるんだものを抱えて盛んに舌打ちしながらそれを叩いています。皆がびびりして中を開けて見ると中から運動靴が二足出て来ました。つまり家を出る時、弁当の包みと靴の包みを間違えて靴の方を大事に抱えてこ迄来たと言っています。あわてるにも程があり、可笑しいやら気の毒やら果ては大笑いとなつてしまいました。

この一行に水客、潮花両君が交っていた事は言う迄もありません。

車座になってハイクは昼にする

握り飯山の空気を吸い乍ら

# 夜

丸尾潮花

ネオンの灯襟かけかえて逢にゆく 千代美

太陽の光りがビルの谷間に沈むと、待つていた様に七色のネオンがともり、大都会はよるめきの夜の化粧をはじめ。誘蛾燈を慕う集る虫のように、夜の灯を慕う人々の足は期せずして千日前から道頓堀、心斎橋に集つて来る。宵の川風をスカートの裾にふくらませ乍ら恋を待つ男女の姿が一つ、二つ、三つと、道頓堀から宗右衛門町に懸けられた橋の上にはちらほらと見かけられる。誰かまつ虫の粹な小唄の味をどこかにまだ残す様な和服の襟あしに夏の夜風をうけてひとを待つ姿は美しく悩ましいものを覚える。余程恋を待ったと言う心の焦燥は今にも泣き出しはしないかとさえ思われるほど悲しそうな、やるせない瞳で眼の中の雑踏からたった一人のひとを追いかけてるのである。待たされた時間がたとえ二十分か三十分足らずとしても待つひとには余程に長い時間にも感じられるに違いない。やつとあきらめたのか待ちくたびれた顔にバフを当てると道頓堀の灯の渦へ消えて行つた。二つ、三つ橋桁をくぐり抜けて行くボートの灯に若いローティーン、ハイティーンの淡い夢はネオンの色を浴びて散るオールのしぶきの様に夜を讀んで躍動する。白いカッターに赤いネクタイ姿のグラマーガールの口笛も軽やかに雑踏を縫うてゆく。宗右衛門町からお座敷へ招かれる芸者たちの絵のような後姿へ、気遣いじみたうめき声をあげるのも少々お酒の廻った奥さま以外にはお金でもなければ恵まれそうもない御器量の殿方連である。

「あんなあの人に逢つたの」

「一度だけ」

「そう」

「であのこ話して見た」

「言えなかったわ」

「どうして」

「でもね」

「ハッキリして置かないとあとで困るんじゃない」

「うん私ただ何も言わないで此の儘でいいの。それで仕合せじゃないかしら」

「あんなと言うひとはね」

こんな女性の会話を道頓堀の夜は他人の私の耳にもソツト聞かせて呉れる。やがてみおつくしの鐘が鳴り終つてから三〇分もすると、チールームのテレビも消え、息づまるようなキャパレートのロカビリーからステージはノターンを奏で始める頃になると激しい夜の昂奮から覚めた一瞬の哀愁を抱き乍ら歓楽街から人々は何処へともなく帰つてゆく。今の先まで雑踏に埋め尽くされていたアスファルトも灯の光を浴びて白い生地をハッキリと現わしている。芝居のはねを吐き出された人々の眼には宵の雑踏はなく川筋のホテルの灯がいやに眼につく、二十三日、水も動かぬネオンの灯を抱いて眠ろうとしている。

「今夜だけ帰してほしいの」

「一寸都合の悪いことがありますのやけど」

「……お願い」

女は急に声を落した。其れから先の言葉は聞きとれない。男の方は、いいとも、悪いとも答えないう様である。ただ黙ったまま、人通りの絶えた日本橋を東へ向つて歩いてゆく。

御贈答に

大丸の商品券

大丸  
大丸心算盤

三百円〜一万円  
東京、板橋、神田、池袋、高知、鳥取、下関、別子、博多に共通  
一階 御堂筋側



# 入門講座

戸田古方

## 研究題「裸」

かくせば見たくもなり、着てい  
るからぬがしたくもなりません。流  
行は巡って、ヌードからグラマー  
へ。みんな何処かほんとのものに  
ふれていきます。

万人がドングリの背競への時代  
には陣笠ということばはなかった  
でしょうに。生れた時にはまる裸  
ということをとくに忘れてしま  
うほど、今日では世の中がややこ  
しくなっています。

駄目八さんはある仏書でみつけ  
た句だと、「裸にて生れて来るの  
に何不足」をテーマにして、次の  
句をよせられました、

ケチなこと言うな裸で生れ  
た俺ら  
べらんめえ生れた時を考え  
ろ

坊さんは裸になって唄わん

せ

この中では、しまいの「坊さん」  
の句が一番よろしい。テーマにな  
る仏書の句というのがそもそもな  
んです。人の口によく憶えられる  
句というのはえてして、この手の  
句ですが、一寸とした穿ちで満  
足するのが大衆なんでしょう、か、  
目や耳の美しさはなくとも、映画  
「どん底」や「蜘蛛之巣城」など  
に見る美しさまで掘り下げようと  
しないのでしょうか。いくつ何十  
になってもお山の大将をきめたが  
るのが人間、その欠点にきがつい  
て民主主義を一番早く発達させた  
ギリシャで、裸が礼讃されたのも  
わかるような気がします。

湯の中の社長は威厳失墜し

どんたく

威厳失墜とは大きく出たもので  
す。だがこの御大層さがうまく生

きているのです。

腕やからだで国土を守りぬかね  
ばならなかったギリシャでは美し  
い均斉のとれた肉体が理想とさ  
れ、ミロのヴィナスやデイスカの  
彫像をのこしたのです。

貧しさを脱いでマリヤのよ  
うに立ち 歌子

人体のもつ複雑さは衣を脱いだ  
ときに極まります。円と球と円筒と  
円錐が無限に組合さっているの  
で、造花の妙はコスチュームの持  
つ色や型や衣紋が逆立ちしても及  
ぶべくありません。「貧しさを  
脱いで」の上五は自然より与えら  
れた美しいものに帰るということ  
とともに、身軽になった気安さを  
も偶意しています、中七の「マリ  
ヤのように」でうけているので、  
身の、心の美しさがマリヤの中に  
エッセンスされています。

傑作の裸体画に見た裸の美

隆文

はズルズルと抽象的な表現で終始  
して、これというアクセントのな  
い欠点があります。これでも美し  
くないのかと押しつけているよう  
にも見えます。人間が裸を問題に  
するようになったのは着物をきる  
ようになってからです。大切な部  
分を守るためにキモノはだんだん  
飾り要素を深め、異性をよぶ種  
族維持の性本能の要素を強くもつ  
ようになりました。

裸がはずか

しく感ぜられ  
るのはこのキ  
モノを着る心  
理を裏がえす  
ところから来  
ています。

鷗汀さんは

「医師の座に

ついて裸も感

じない」とい

ってられます

が、医師は治

療している肺や心臓、さては胃や

腸や肛門やらで、顔は見なくても

名あてが出来るとか聞いています

が、

それでも患者の方にしてみれ  
ば、やはり、はらわたをさぐられ  
に晴着を着て来たり、手術台の上  
までしなを作ったりするのです。

「裸にさせれば乳しかと抱く（一

鶴）」娘であったり「行水の虫を

気にしてる裸（豊年）」の時代

組も出て来ます。そして「どうし

ても裸になれず肩が凝り（自然）」

などなるのです。これが人間の常

態なんでしょう。

だから「裸体画に明治の母は眼

をそむけ（周甫）」でもも別に

不思議ではないのです。わたしな

ども明治の父のために絵の勉強に

横槍をいれられたものですが、裸  
の美を、しまいにはなっとくして

安産のために  
安産のくすり  
ワダカルシエム

ビタミン入小粒二〇〇円  
ワダカルシエムは妊娠中なる  
べく早目からおのみ下さい。

もらいました。静観堂さんの

売物はたった裸のアルバイ

までくるのです。中七の「たった

裸」の「たった」は世の中のうっ

りかわりを手短かに表現していま

す。川柳らしい省略の仕方です

が、読み抜いてゆけば自然に理解

できるたくみさを味って下さい。

人前で裸体になるだけの勇氣は

なくとも「しまい風呂女ボーズを

してみたく（実男）」なるのが今

の若い世代です。そして「ニュー

ルック裸に近いのも売れてゆき

（敏子）」となります。この句は

下五を「売れて」で切ってもよ

く、「売れる」としてしまってもよ

ろしい。とにかく「ゆき」は駄足

です。  
男の裸の圧巻は関取りでしょう  
が、私は生憎とその関取に理想的

男性美があるとも思えません。

それはともかくギリシヤ彫刻のような男性美は過去の日本には少く、たいてい「腹巻のさらしキチンとした肥り(八九寸)」ぐらいの胴長でとても鑑賞にたえるしろものじゃありません。

もう一句のこつていました。句念坊さんの「ふんどしを流して男をよび」です。滑稽は滑稽でも、少々くすぐり笑いです。破れ句の句もします。

腹や胸は心のありかといわれませんが、腹や胸で笑う笑いは精神的な笑いに通ずるもの、批判精神にも通じ、芸術の香もどこからか匂って来るといふものです。

その外には川柳らしい川柳、穿ちの川柳、即ち頭の川柳があります。川柳が理智の要素をもつといわれているのはこの頭の笑をさしますが、毛筋一本のちがいでクスグりに、批判、芸術性をもつものにもなります。

あまり行儀のわるい裸の句のなかったことはさすがですが、原始人や未開人に関する句は一句も見かけませんでした。

研究題「ねぎる(値切る)」  
切 七月十五日  
発表 九月号予定  
投句先 豊中市本町三丁目二

戸田古方



# 私 の 作 句 法

武 部 香 林

作句に対する信条、それはたゆみなく作句精進をする事にあると思ふ。マンネリズムを脱脚する事、新しい着想を生むために絶えず心の眼をみはっている事。句材を掘めばすぐ一応句の形体にして用意の紙に書き止めて置くのである。折角の卵を紛失しない為である推敲を要しない場合もあるが、三年も四年も籠中に温められたままやっとなめても満足を得られないものもある。

いた事は、少からぬ損失であった。第二段の頃始め小型ノートをポケットにしていたが、不便を悟り紙片で巾二寸五分長さ八寸ほどのものを四ツ折りにして、チヨッキの上のポケットに入れておく事にした。道を歩き乍らでも応接室に待つ間にも浮んだ構想をすぐ書き止めておく、何枚もの紙片へ川柳塔何々支那、本社句会という風に題と句会の日時、場所を記入しておけば、とても便利であった、之はカード式のお得意名簿にヒントを得たものである。

## 金 泥 集

課題「視線」

選 乃 菫 生 麻

(天) オツケイの視線笑顔でうけとめる	俊 江	視線もう感じぬほどに舞台馴れ	俊 江
(地) 目が逢うただけでわかってくれるひと	若 芽	惚れている視線が強い意思表示	同
(人) かたつむり視線を逃げる急ぎ足	きさ子	母上の視線を背なに参 観日	美 喜
よるめきの視線と知って座をはずし	花代子	視線いつしかウインクに変わって来	同
子の視線母とは別なものを追	同	純情な視線みつ豆食べて いる	知 恵 美
遠くからも言いたげな視線なり	小 石	遠ざかる視線ホームの霧に立ち	同
けだものような視線に身がすくみ	同	舞台から視線の来たをうれしむ	若 芽
そらした視線別な視線とぶつかり	阿 茶	恋すでに背なへ視線を感じてる	きさ子
視線もう他人でないと見てとられ	同	いやらしい視線をヌード感じてい	富士子
その視線男のほうを下を向き	万 女	バスの中視線をそらして掛けてお	悦 子
孤独の日視線は雲を追っている	同	血の騒ぐような視線へぶつかり	玉 枝
うるさがる視線気づかずとくしやべ	たつよ	さりげなく視線をはずしええ月や	吟 女
男みなあきれドライの娘に視線	同	インタンの視線をあげて安産し	カネ女
ピツタリと視線が合つてあわてさせ	同	私も同感ですわと 視線合	メ 女
裕次郎の視線へ客を総立させ	同	釘づけの視線へ自由もう利かず	明 美
		茶菓配る手つきへ視線をそがれる	そと枝
		視線合う瞬間バスの横切りて	雅 佐 女
			奈 良 子
		視線ふと感じてからの恋となり	史 子
		恋の視線へ青春の血はおどり	一 栄
		視線もうとどかぬホームに立ちつくし	周 甫
		ウインクを他人の視線にさせられ	沙 智 子
		ラブシークを他人の視線にさせられ	小 菊
		ある時の視線が愛情芽ばえさせ	都 詩 子
		羽田港視線の中を時の人	登 志 子
		盲目の舞台視線は気にならず	よ し 子
		満員車視線のやり場と困り	初 穂
		あの視線信じていいかなと思	和 子
		鏡台に合つた視線が用を足し	知 恵
		視線だけで心が通う仲となり	清 子
		視線もうとどかぬ人へ立ちつくし	清 子
		天井へ視線を投げた 試験場	陽 子
		花嫁の視線 畳の目を数え	美 舟
		コンパクト視線を意識したま	若 菜
		叱られる意識へ視線だけがさけ	綾 女



# 句の結びに

## ついで

### 早川清生

金

川柳と俳句を識別する方法として、ある俳誌の主宰者は、句が動詞連用形で終るのが川柳、終止形で終るのが俳句だと述べておられます。俳句の大家にして川柳にこの程度の理解しか持っていないのは残念ですが、ともに十七音の短詩型として、指向し進む窮極は一致するとも言われておりますし、現に生活との直結を考え出した現代俳句はしばしば川柳の領分を侵し、容易に鑑別できない句もたくさん現れております。そこで前記の簡易識別法が成立するかどうか、手近の川柳雑誌について句の坐五がいかなる品詞によって結ばれているか調べてみました。(任意抽出五百句、%未満四捨五入)

名詞	二三%
代名詞	〇%
動詞	五〇%
内連用形	三九%
終止形	一一%
形容詞	二%
形容動詞	〇%
助動詞	一六%
内連用形	六%

実に全体の句の三分の一以上が動詞連用形によって終っております。俳句が殆んど終止形で結ばれているのは周知のところですので前記の見分け方も、一応は妥当とも言えるわけです。

それなら昔の句はどうだったでしょうが、同様にして柳多留を調べ、前述の現代川柳の場合と比較してみました。(差とは現代川柳より古川柳を差引いた値、△印は負数)

名詞	三五%	差△一二%
代名詞	〇%	〇%
動詞	五一%	〇%
内連用形	四六%	△一%
終止形	五%	△七%
形容詞	六%	△六%
形容動詞	〇%	△四%
助動詞	七%	〇%
内連用形	〃	〇%
終止形	〃	〇%
形容詞	〃	〇%
形容動詞	〃	〇%
助動詞	〃	九%

内連用形	一%	五%
終止形	一六%	四%
助動詞	一%	八%
感動詞	〇%	〇%
接続詞	〇%	〇%
副詞	〇%	〇%
計	一〇〇%	〇%

資料としては用いた句数がやや少いからいがありますが、古今の差異の一端はのぞけると思います。まず目につくのは古川柳に比して現代川柳は(少くとも川雑において)名詞止めが減少し、その分だけ助動詞止め乃至は助詞止めが増加していることです。しかしここに挙げた助動詞の連用形は殆んどが受身の「れ」「られ」であり、終止形は主に文語から借りた「ず」であって、ともに動詞の未然形に付属しております。また助詞は「て」を始めとして用言(動詞・形容詞等)に付くいわゆる第二種の助詞が圧倒的に多く、この場合助動詞、助詞ともに用言の延長とみなすことができます。これらから現代川柳は体言(名詞・代名詞)止めから用言止めへ移行していると考えてよいと思います。もちろん体言止めが必ずしも悪いものではありませんが、言葉としては用言で終るのが自然であり、本質的な形であります。体言止めは往々にして軽薄さや稚拙さを伴うことがあります。

ただですら問題にしないことにします。連用形止め

これしきの鳥居へ母は手をかざし 角嵐

終止形止め

横車押す気定刻通り来る 不二

もともと川柳の発生は前句附にさかのぼり前句附の附句が独立して一つの文芸となったものです。前句附とは、例えば「はればれ」とするはればれとする」という七七の前句(出題)に対して「腰元は寝に行く前に茶をはこび」と附句します。これが披露の時に「腰元は寝に行く前に茶をはこびはればれとするはればれとする」と読まれたのです。従って古川柳に連用形止めが多いのは一首としての構成上至当であり、安定した姿であつたわけです。

次に動詞止めは内容的に大きな変化を示しております。即ち連用形止めだった大きな部分が終止形止めになりつつあることです。冒頭の柳俳識別法には気の毒ですが、川柳にとつてはこれも結構な変化です。ここで取り上げたいのはこのことなのです。なお他の活用形はごく稀に命令形止めがある

しかし前句を捨て去った川柳が、いつまでも連用形止めには拘泥するのはどうでしょう。もとより連用形止めには捨てがたい持ち味があります。ながい間の手慣れた得物として私たち川柳人は連用形止めというだけで特別な雰囲気を感じるまでに慣らされていきます。だが万一、連用形はそれ自体で終る言葉でなく当然次に主として用言が続くことを予測しているという形の上から、余韻のある言葉だと信じられているのなら困るのです。「言いさせて何かある」という余情は、形からでなく内容から来るものでなければなりません。

現代の生活上の、あるいは時間的な緊迫感を現したり、句を引きしめたりするには終止形はるかに適していますし、言葉として近代的な感覚も持っております。これ

に反して連用形は語感上のゆとりと飄逸味を持っております。終止形が句の勢を食い止め強めるなら、連用形はさらりと受け流す趣があり、どちらも一長一短があると言えます。従って先人が愛したからと言ってこれを遺産視し、不用意に連用形を使用することは一考を要することなのです。出句の中には無意識に連用形を用いたと思われるものがたくさんありますが、句が動詞で終る場合、連用形で結ぶが終止形にするかは、旧来の伝統にとらわれるのではなくあくまで詩感によっていただきたいと思うのです。その上で私たちのエスプリを十七音字に定着したいのです。



### 文字の第一印象

不二田一三夫

川柳阿倍野支部で「薔薇」(バラ)の選を仰せつかった。バラの花言葉である、愛と美を頭に入れて、少くも愛と美をうたったものがほしいと思ったのに、そこでぶつかったのは、悪臭につかう「臭い」という字である。よく読むと「匂い」のまぢがいらしいのであるが、句箋を手にした第一印象はまことに汚ないものを感じたのである。選にあたって、これはいけないと思いつつ没と入選の中間にひとまず保留して、あとで気分をかえてからいま一度読むことにした。だが、やはり、そこからは美というものがある月のこと、

「……………小鹿にした旦那」という句が回

ってきた。なんのことかわからないので、清記もできず、その句を選した某ベテランにうかがって見たところ、  
「……………小馬鹿にした旦那」だ、そうである。しかし、その句箋には「馬」がないのである。ここで私はつぐつぐ選者とはあくまでも親切でなければならぬものと深く考えさせられたことであった。

## 川柳不朽洞会員のシンボル！ 美しいバッジが出来ました

スマートなデザインは、キットお気に召すものと自負しております。川柳まつりには不朽洞会員全部がこのバッジをつけて総出席いたしましょう。(1個200円・送料8円)

申込所

大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地

川柳雑誌社

(振替口座大阪 75050番)

### 川柳雑誌社支部 7月の句会

<p>所題時 20日(日) 明和研究会 土用・縁談・集る 明和興業KK和室</p>	<p>所題時 18日(金)五時 祝辞・吐雲・踊り 扇橋交通局病院サニールム</p>	<p>所題時 15日(火)六時 若葉・性分・枕 大道一ノ二天王寺小学校</p>	<p>所題時 3日(木)五時 祝(二十句)馬鹿・ひとり言 堺市老松町三丁島野工業KK</p>	<p>所題時 17日(木)六時 善意・看板・汗 玉出新町通一の二一梅志居</p>	<p>所題時 16日(水)六時 御神燈・西瓜・我儘 旭町二丁目 金塚会館</p>	<p>所題時 10日(木)七時 先生・同情 大阪信用金庫階上(市電玉造南一丁目)</p>	<p>所題時 2日(水)六時 あの手この手・割込み・ハンカチ 十三西之町東淀川郵便局</p>	<p>所題時 13日(日)十三時(会費三百円) 舞台裏・踏む・清潔 国泰寺町徳田旅館</p>
<p>所題時 16日(水)夕 小川・恵み・巾 四条繩手 仲源寺</p>	<p>所題時 13日(日)一時 三度目・とし頃・豪傑・見舞 米子市公会堂 日本南</p>	<p>所題時 13日(日) 敷島紡績(汀氏宅)</p>	<p>所題時 13日(日)一時 はつきり・子供連れ・片足 宇部市常磐公園 白鳥池</p>	<p>所題時 12日(土)六時半 夜店・浴衣・花火(課題) 南区二条町二丁目 近藤千古居</p>	<p>所題時 6日(日)一時 うどんお月さん・蔵木餅・留守の子 木島弥生町四ノ三 梶原一善居</p>	<p>所題時 5日(土)六時半 川柳・祭・夏の飲物 りいち西房</p>	<p>所題時 1日(火)六時半 見栄・隙間 大和町 伊藤茶仏居</p>	<p>所題時 24日(水)六時半 才女・西瓜・船底 難波駅高架下親和くらぶ</p>

# 一路集



## 動物

### 市場没食子選

動物のまねで賞金式千円 和子  
 スナップへ一寸待つて犬を抱き 千甫  
 動物になるも年期の要る 役者 葵丘  
 子を産んだ山羊はフスマでいたわれ たけし  
 一片の肉で猛獣あやつられ 井蛙  
 感情の動物後悔ばかりして 惠二朗  
 動物の世界をせまくする文化 雄々  
 動物の映画長期のロケを述べ 保夫  
 動物の似声で鐘が三つ鳴り 蜻蛉  
 有り余り動物学で世を終り 夜潮

パパの方がチンパンジーへ夢中なり 保美  
 河馬の顔猿の知恵持つ養子が米 光郎  
 ロカビリー動物以下と言うセンス 養流  
 クダモノの心になって取立てし みのる  
 動物の檻それぞれ型で出来 豊年  
 たかが犬くらいへ何万円も出し 翠月  
 座敷で飼う犬をきたなく見て帰る むじな  
 死の灰のこわさを知らぬ犬や猫 春雄  
 人が住むように動物小舎が出来 美音子  
 若草に牛の毛並が光り出し 陽子  
 動物の仲間じやと言うナメタジラ 雄声  
 動物の習性悲し縛につき 不二  
 動物も生きねばならぬ闘争し 圭木  
 動物です第一ヒントでうまく当て 秀三  
 ジヤングルの記録映画にあるスリル 一鶴  
 猫も春ネズミがおるとおろまいた 幽谷  
 朝な夕張切つて山羊の乳しほる 房子  
 暫らくは遊ぶ動物ビスケット 漣  
 動物に芸を教える根気よさ 葉光  
 ペンギンが動物園で汗をかき 進之助  
 サークスの動物芸のないのも居 白溪子  
 住  
 子供の日動物園は混んでいる 秀三  
 モルモット程は人体効果なし 三四郎  
 小男がキリンの前で背延びする 句念坊  
 新薬が動物実験ほど効かず 一鶴

色紙短冊  
 書畫用品  
 大坂戎屋  
 丹精堂  
 本町二丁目

子供の頃は猫の喧嘩だと思ひ 芳仙  
 実験の基礎なる身のモルモット 一休  
 霊長という人間に星が飛び 進之助  
 変な動物が来たそとペンギン寄つて来る さんたく  
 人  
 コーラスに合せて象が鼻を振り 代仕男  
 地  
 冬陽背に鰐一耗も動かざる 七面山  
 天  
 公園の猿人前もはばからず 宗太郎  
 動物にしてからがこの母性愛  
 軸  
 世話  
 山根白星選  
 相手にもよりけり世話なるこまめ 笑太

## 川雑にしなり支部 暗峠吟行

橘高薫風子

六月一日、午前九時半、近鉄上六に集合したのは、木客、梅志、文秋、省三、す、む、旅風、薫風子の七名。誰からか「川柳七人のさむらい」の声がかかる。枚岡駅下車、枚岡神社に参拝。この頃にはもう各自が句帳に鉛筆を走らせる。すばらしい意気込だと感じ入っていたら、誰あるう、既に上六で一句ものにしておられる御仁があった。

待ち果けの顔を時計に見下され 省三  
 青葉曇りとでも言いたい吟行にはうつつつけの天気である。

三三五五三三五五と風渡る 木客  
 併し、山路にさしかかるや、鶯の声とは別に、上衣を脱ぎワイシャツをかなぐり捨てる暑さである。

昔の人は旅を味った。径を楽しんだ。険しい坂があればやや平坦なそよ風の道に出る。そこには、寛に水が流れている。径は曲れば上り、視界は開ければ又塞った。我々は先人の心を思いながら登った。鶯の声しきり。

道つけた苦心を上り坂で知り 梅志  
 一句出るたびに皆んなに追いこされ 梅志  
 六月の陽を行く生きた僕の影 旅風  
 山嶺の足の軽さも急な坂 旅風  
 小休止三度にして暗(くらがり)峠の

世話好きの目には似合の二人なり  
 度を超えた世話が野心を見透かされ  
 まだまだ世話にならぬと父頑固  
 金故に世話になる気の目をつむり  
 世話好きもお金のことは空とほけ  
 世話やける子ですと母の業しそ  
 世話好きの手帳適齢期で埋まり  
 益裁の世話こまごまと言うて発ち  
 世話好きで仲裁好きでお人好し  
 人形の世話ママさんの声になり  
 世話をやく俸せ妻の座がぬくい  
 年金の余生は鶏の世話で足り  
 居候世話になったとそれつきり  
 コンクール優勝ねらう菊の世話  
 世話好きな女将をたより躓ちて行き  
 子の世話にまだまだならぬ薪わり  
 世話されぬ老後を貯めて如才なし  
 世話好きも愛想をつかすへそ曲り  
 世話好きの夫婦子供のない生活  
 世話やかす奴や世話好き腰をあげ  
 世話ばかりして貧乏抜けきれず  
 そんな世話にたりましたかと二日酔  
 世話好きが二言目にはまかしこ  
 世話好きの落語の型で長屋に居  
 膝許へ最後迄おく不憫の子芳仙

結局は世話する人が中に立ち  
 世話好きが朝から家をあげて出る  
 世話好きが逆に吊した抽象画  
 贈物を世話してそれつきりさなり  
 世話のないおかずにしごと共稼ぎ  
 世話好きが勝手に腹を立てており  
 世話好きがなんやなんや寄つて来る  
 収入を聞いて世話好き考える  
 世話すると言うのにマンガ読んで居り  
 世話好きにもう恋仲をさどられる  
 世話頼む客間お茶にはふれず待ち  
 甘たるいお世話断ち切る未上人  
 世話好き三言のれしやほりこも言われ  
 世話人のお開き来うどん熱いうち  
 初七日と言うにお世話しまししようか  
 お世話様でしたと観光バスを降り  
 世話好きへ拍手で幹事おしつける  
 もう世話はしないと云った人の世話  
 世話好きのきれいな嘘を責められず  
 もう世話にならない腹の高笑い  
 世話したいなどと男のうまい口  
 世話やきがアパート中を風邪にする  
 世話好きの家にオールドミスがおり  
 身の廻りお世話になって忙しがり  
 いい人をお世話しますと言っただけ  
 三林坊

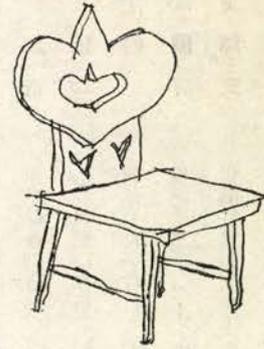
世話になる名刺は定期入れにはせ  
 真実の世話は他人がして呉れた  
 葬式に委員長あり無事に済み  
 舌の根のかわかぬ中に世話になり  
 点晴を欠く世話金に突当り  
 素人となりアパートで世話をうけ  
 世話好きへ山下清鼻をかみ  
 産制を洩れた子供の世話になり  
 喰うための世話は鶏も知らざりき  
 ほっといてほしい御世話と思ふ恋  
 仲人は要らぬお世話の恋をする  
 世話うける母と薄々知つて来た  
 軸 白星

茶店に着く。昔、生駒或は遠く大峯山へ  
 行く行者にも難所として知られた峠だ。  
 名前からしてが鬱蒼として風なお暗い往  
 時をしのばせる。附近に修業道場である  
 慈光寺と、乳母の滝など二つの滝がある  
 案内地図ではあるべき管の芭蕉の句  
 碑がない。が、何としても、鶯とほとと  
 ぎすの声に囲まれた峠の茶屋は今日の大  
 きな題材だ。  
 老杉が暗峠らしくする 薫風子  
 峠茶屋由緒あり気に静まれり すゝむ  
 新市制峠の上は十番地 省三  
 峠茶屋義理で一本飲んで行き 文秋  
 鶯へ峠の茶屋を残して来 薫風子  
 茶店から生駒山頂へは一直線の径だ。  
 単調だが胸を突く峻しさの甚だ無理な径  
 筋である。  
 生駒信貴縦走ハイキングコースの一角  
 で比較的新しく墾かれたのだから。味の  
 ない道だ。笹鳴きの鶯に交ってほととぎ  
 すが、てっぺんかけたか、てっぺんかけ  
 たかと声を競う。名も知らぬ鳥がその合  
 の手に鳴く。我々は鳥の心を思いながら  
 登り続けた。  
 峠道鳥の楽しさなど思い 文秋  
 降りそうな空を気にせねばさき 水客  
 汗、汗、汗の胸突八丁を登りつめた  
 ら、がらりと空が開けた頂上だ。  
 家族連れで賑う生駒山頂で、遅い昼食  
 を摂った後句筵を開き、愉快な一日をも  
 う一度振り返って見た。  
 暗がりを越えれば生駒人くさし 梅志

品質優良  
**先ペンカチ**  
 TACHIRAWA PEN  
 カワペン  
 ワカ画  
 カワ銀  
 タチ画  
 タチ銀  
 タチ銀  
 大坂市東区常盤町一丁目十一番地  
 立川ペン先株式会社



# 柳界展望



## 旬会

▼本社七月旬会は六日(日)正午下寺町光明寺に開催される。お待兼ねの川柳祭である。多数お越しねがいたい。本年は参加支部数もふえ従って優勝の争だつ戦は熾烈であろう。若い作家のひた向きな努力は年々川柳界まつりを盛上げて来た。幸い上天気であるように。

▼杏林川柳会(大阪市)旬会は六月廿四日(火)午後七時半道頓堀観光ホテルで開催。当番幹事一仲氏。▼大阪通信病院鳥ヶ辻川柳会(大阪市)旬会は六月十四日(土)午後二時五階会議室で開催。▼南海電鉄(大阪市)旬会は六月廿六日(木)午後六時半難波駅高架下親和くらぶで開催。以上何れも路郎主幹出席。

▼第三回大牟田熊木地区作家交歓大会(川柳噴煙吟社及びみいけ川柳クラブ主催)は七月六日(日)正午玉名市立願寺温泉みどり荘で開催。兼願活字・家族・ジュース各題三句。会費百円。投句料三〇円。投句先熊木局私書函四十五号。川柳噴煙吟社後援西日本新聞

▼川柳備前支部(岡山県)旬会は五月二十四日一斉居で開催。▼竹原川柳会(広島県)旬会は六月七日開催。▼川柳米子支部松露旬会は六月八日午後一時同地公会堂で開催。▼川柳倉敷支部旬会は六月二日午後六時福原一善居で開催。▼川柳高知支部旬会は六月六日汀居で開催。▼川柳岡山支部旬会は六月七日赤支部で開催。

▼竹原川柳会(広島県)では前田伍健氏を迎え来る九月十四日(日)近県川柳大会を開催する。▼川柳人編集所(東京都)では井上信子刀自の追悼号を近く単行本形式で刊行される由。

▼川柳にしたり支部(大阪市)では六月一日暗がり峠から生駒へほととぎす吟行をした。一行九名健脚家揃い。

▼汐風川柳社(愛媛県)主催第四回愛媛川柳研究大会は五月二十五日今治市黒住教会で開催。前田伍健、月原啓明、長野文庫氏ら参会八十五名の盛会であった。

▼電々川柳会(熊本市)七月旬会は十九日(土)一時から熊本市大江町熊木電通会館で開催、兼題

「太陽」「ビール」各5句吐、柳話田中辰二氏。投句先同市同町熊木通信病院内投句料二十円。▼観光川柳研究会(東京都)七月旬会は十三日五時から港区芝新橋六ノ六伊藤藤天居で開催会費五〇円兼題「花火」「夜の浜」「夏祭り」投句料三〇円。▼現代川柳社七月旬会は六日(日)一時から市川市京成真間駅前、吉田橋同病院兼題「百」「じりじり」「高い」「スリル」「切手」各5句詠。

## 新刊

▼川柳新書第三十一集。石曾根民郎集。著者のことば——今日に生きる人間として今日の句を得たいと願ってはいはる。古い観念を先ず打ち破りたい。新しい理念を味いたい。時の流れのままに新奇さ追わず今日ある川柳のゆくへに自分の持てる主張と希望を投げかけて私の句を鑑賞しました批判してくるるひとと語りたい。「生きてゆく鼻へさびしうのあたり」外民郎作品七十八句を収めている。非売品川柳新書刊行会

▼国文学解釈と鑑賞(川柳大鑑)七月特集増大号として古川柳鑑賞や沿革史風の読み物を満載。川柳各社の主張もとりませ面白く読ましている。一説をおすすめる。路郎著「川柳とは何か」の出版社東京至文堂発行。菊判二二〇頁定価一七〇円(送料十六円)

▼画伯八十翁菅植彦氏(大阪市)に対し芸術院恩賜賞が下附されその祝賀会が文芸懇話会のみもいりて大阪市東区国際見本市会館で開かれ本社から路郎主幹が出席した。▼川柳人野球大会を七月六

日午前10時(雨天の場合は十三日)おたまたま電通搬送通信部グラウンドで開催。参加無料とのこと、主催川柳宮城野社。

▼八木摩太郎氏(堺市)の懇請により路郎主幹は縁故の深い堺市友会紙へ特別寄稿した。堺市友会総会は六月十七日(火)午後一時堺福祉会館で開催され路郎主幹出席

▼前田伍健氏の「松山城、道後温泉、堀ノ内の今昔」などが松山テレビ開局一周年記念「松山の今昔」の撮映に採択された由

▼河村日満氏(鳥取市)は五月二十五日(日)鳥取川柳会の若人、耕民、湖山、三歩、星影、秀和氏らと三朝養養所に於ける川柳会に出席新人の同志と親しく作句した。因に三朝川柳会の指導に当る大前鳴恍氏は今回不朽洞会へ入会することになったから同地の川柳は今後急速に発展することである

▼錦木上野専一郎氏(小松市)六月十三日夕刊北国新聞「随想小松まつりの由来を寄稿した。本年は祭神前田利常公の三百年祭にあたる由。

▼蛭子省二氏(愛媛県)は宿痾の加療中であるが子規居士と同様日々痰一斗、終日腹鳴食欲乏しく何んとかして箸を持ちたいと苦心の由。体重六貫八百にして左の句信を寄せられた。神助を遙かに祈る。「百万圓みほとけ光る糞をたれ」▼橋本慈雨氏(大阪市)から短信五月廿四日は快晴で一日中富士が見られたと。同氏は富士五湖から箱根、強羅、十国峠を経て熱海へ行かれた。「いろいろの姿にな

なって富士は立ち」

▼若本多久志氏(西宮市)は社用で金沢市へ行かれた。青葉の兼六公園の風情はまた格別であると西廓から。「白糸のような女は見つからず」

▼正本水客氏(大阪市)は三二年一度大鉄局、文芸年度賞及国鉄文芸年度賞(国鉄全体)の川柳部門で共に第一位を獲得した。尙浅野颯太氏は国鉄で第三位。めでたし。

▼福田丁路氏(高槻市)は五月二十二日から廿六日まで沼津、東京に出張。二十三日熱海二十五日湯河原に立寄り都座を一掃し、左に句信を。熱海にて「アベックに輪甲斐もなく悩まされ」東京にて「二重橋バックに写す共白髪」

▼川柳宇都支部の津秋六花氏(宇都部市)は六月一日米阪本社を来訪、路郎主幹と欲談された。▼川柳弓削支部直原七面山氏(岡山県)は六月七日米阪八年振りて本社旬会に出席された。▼尼緑之助氏(出雲市)は六月十八日商用で米阪団体で高野山に参詣お便りがあった。▼本多省三氏(大阪市)は今回オール画報社を独立新設。凡ての写真画報を取扱うことになった。声援を送る。

▼菱田満秋氏(西宮市)は第一回目手術は経過良好で六月九日二回目の執刀をうけられる由。快癒を祈る。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は貝塚療養所で五月十三日右肺上葉切除、下葉部分切除の大手術をうけ一時想像以上の呼吸困難を来したが二週間後に漸く回復の徴を認め目下静養中▼浜田久米雄氏

消 息

# 不朽洞の人々



五月の川雑婦人友の会川柳大会でのスナップではあるが、この美しいポーズを編集局からお願いして本号にご登場わがった。

## よろしいやろ と写真みせ歩き

(小石)

日頃句会の席上では全没かいなど内心ビクビク。  
家では生々庵から「なァんや、お前の句」とぼろくそ。  
でもこの写真一寸頂けますでしょ。賞祿だけは……。

不朽洞会員ならどなたでも結構です。われとおもわん方は珍しい写真を送って下さい。

—編集局

(岡山県)は五月二十六日から六月十日まで吹田鉄道教習所へ現場幹部研修室出張米阪。朝早くから晩まで少し詰教育でほととずる暇もなくよい機会の六月本社句会へも出席出来なかった。▼丸尾潮花氏(大阪府)はご病氣中の阪東若芽さんを六月八日に大阪府関屋の山荘へ婦人友の会の美喜、玉枝、花代子さん達と一緒に見舞われた。▼林昌男氏(大阪府)は六月一日に岸和田市職業安定所課長から堺市に栄転された。お祝い申上げる。▼河上一也氏(奈良市)菩提町十三鐘のお宅へ電話が開通した。「奈良四九八六」

た。ご幸福を祈る。▼池上知恵美さん(岡山県)の二女和子さんにこのほど養子縁組がととのい五月廿六日盛大に華燭の宴を張られた。御多幸を祈る。▼堀須賀太氏(大阪府)は五月二十六日正本水客氏の媒酌で鳥取の松本悦子嬢と結婚された。ご幸福を祈る。

○人に対し特殊な音楽教育を施し成功している。この本を読むと我々は子供の教育を誤っていることに感づかせられる。専門家が本気で音楽を仕込めば五才、六才の子供は、大人より器用にパッパやモツアルトやベートーベンを弾きこなすという。我が家の子供を見直す必要がある。価三〇〇円東京銀座尾張町ビル 大東京社版山下清装訂。

▼六月号13頁三段27行目、もませと訂正。▼六月号一路集(3頁)三段目八行、九行麦秋とあるは満秋の誤りに付訂正。

理事會々費の件、川柳まつり打合せの件、各部会の活動に就いて等協議した。出席者路郎先生、生々庵、文蝶、潮花、葉、多久志諸氏  
会員種別變更  
維持会員に  
伊藤茶伝氏(五月から)  
長野井蛙氏(同)  
菊田いさむ氏(同)  
尾崎方正氏(同)  
那谷光郎氏(七月から)  
新会員紹介(六月入会)  
大前鳴悦氏(倉吉市)正会員  
——美笑氏推薦  
福田多可志氏(鳥取県)正会員  
森田若人氏(鳥取市)正会員  
岡嶋芳道氏(鳥取市)正会員  
北村三步氏(鳥取市)正会員  
——日満氏推薦(多)

▼大谷月都氏(守口市)は大阪府旭区上辻町四五へ移転された。▼西垣武彦氏は大阪府阿倍野区北島東二丁目四三番地ノ一へ転居された。

▼阿波木頭民俗誌。近畿民俗学会編。民俗学というのは、珍奇な伝説や奇習や民謡や妖怪変化の物語を紹介するのが目的でないことが本書にはっきり示されている。民俗学とは、われわれ日本人のこの日本の島に移り住んで来た生活の歴史を明らかにするもの。本書は徳島県の奥地平家の残党と目される木頭村の生活記録である。民俗学というような、こんな地味な仕

▼川雑阿倍野支部長に金井文秋氏が就任した。連絡事務所は阿倍野区旭町一ノ一。○木村十哲方(電話〇二〇八二)▼毎月の各支部の「句会案内」欄への原稿は出来るだけ早く企画しりのり遅れぬように通知されたい。(梅)

常任理事會——三  
月二十日(金)午後  
七時市内三休橋詰中  
島生々庵居で開催常

(多)

いのちある句を削れ



投稿規定

用紙は原稿用紙 文字は正  
随 締切毎月二〇日 投稿先  
本社宛

### 本社六月句会 (大阪市)

6月7日 午後6時

於 光明寺

太陽のない季節——六月。きのうまで  
好天気がつづいたのに、きようは朝から  
太陽のない日となった。しかし特別課題  
を作句するには休めぬ句会とあって、出  
足はすこぶる好調である。支部に属して  
おられない人々には、これが、ぶっつけ  
本番とあって、予告はしてあったものの、  
ちよつとマゴツかれたようであった。

遠来石居高志氏 (東京) 直原七面山氏  
(岡山) や、お珍しいところでは高鷲曲  
鈍氏、大坂形水氏のご出席が、会をより  
賑やかにしてください。

川村好郎氏は柳話と句評のカクテルだ  
と前置されて、句にユーモアは大切では  
あるが、なによりも反省ある句を作るよ  
うよびかけられた。六月号の川柳塔から  
圭井堂・一三夫・草一郎・一瓢・梅志・  
八歩・香林・葉光諸氏の句を例にあげ、  
真実の声と、生活の叫びのある反省を、  
よく十七音字につづられたと二十分間に  
わたって、とうとうと述べられた。

活気ある披露陣に対し、名乗りも明快

に、進行はなほだ快調そのものである。  
天位受賞者はベテラン、中堅、新人と入  
り乱れたが友の会の久米奈良子さんが  
堂々二題を射落し満場をアツと言わせ  
ば、西宮病院支部の新鋭吉本善風氏が、  
六月の不朽洞杯をカツさらうという、清  
新の気が会場にあふれた。  
新人よ、これに続け。ベテランこれを  
追えと、早やわれわれのおもいは七月の  
川柳まつりへはしる。—— 8時45分閉  
会。

(F)

出席者 一路郎・圭井堂・三司・淡舟・  
句念坊・一三夫・柳宏子・奈良子・千里  
・堰子・十悟・薫風子・罔男・好郎・井  
平・牧人・須賀太・いわを・一乃字・旅  
風・す・む・六竜子・木堂・水客・麦福  
子・鶴汀・一十・進之助・瓢太・多久  
志・圭水・潮花・花車・豆秋・いさむ・  
文蝶・梅里・梅志・七面山・栗・静馬・  
文秋・狂二・漣・省三・月都・悦子・竹  
荘・形水・亜鈍・青風・一瓢・白水・高  
志・武助・永断・高史・繁雄・義弘・貴  
山・舟遊・雄声・一興・春巢・晃・悟郎  
立児・蘭・与呂志・博也・凡九郎・利武  
・葉乙女・求女・鬼美・白柳子・恒明・  
晴雄・庸佑・宏子・霞乃

#### 兼題「朝刊」 麻生路郎選

朝刊の戸に挟まれて留守が知れ 失名  
朝刊の学芸欄は読み残し 阿茶  
ババがまだ読まぬ朝刊反古され 美音子  
朝刊をひろげおつゆの味もみる 花車  
朝刊と言えば眼鏡も子は添える 知恵美  
朝刊がようやく読めた主婦の夜 奈良子  
朝刊の端が濡れた不気嫌さ 瓢太

パンガローから朝刊を読みにくる  
朝刊を交待ちかねる齢になり  
また朝刊で嫌な記事見た運転手  
読みもせぬ朝刊奴も持っており  
朝刊へマダムゆつくり目を通し  
朝刊の北浜覗く端株もち  
病人に朝刊来たと起こされる  
朝刊へうちの会社が焼けていた  
朝刊を重役室でゆつくり見  
日曜の朝刊牛乳とも盗られ  
朝刊へよんべの事故を探して見  
朝刊のどこかにあった訓話なり  
皆送り出して朝刊母が読み  
閑職の椅子で朝刊読みつくし  
朝刊をもつて焚火へ背をむけ  
朝刊がはさまったままだが当り  
朝刊にをまげつくとトースター  
朝刊のスボーツ欄は子に持たせ  
勤評如きに朝刊こう食われ  
何時起きても朝刊ちゃんとい  
朝刊の相談欄が妻の趣味  
二階借り就職欄を読みに来る  
朝刊を屏に敷いてる外野席  
朝刊を指名犯人待ち兼ねて  
朝刊を見たかと事務所騒いでい  
朝刊が来て寝しずまるお茶屋筋  
朝刊で選挙参謀引っぱられ

路郎  
幽谷  
文蝶  
三林坊  
与呂志  
与呂志  
瓢太  
一瓢  
一三夫  
梅里  
梅志  
葉  
旅風  
鶴汀  
鶴汀  
たつよ  
一十  
狂二  
三司  
堰子  
雄声  
花車  
花車  
花車  
朝刊の北浜覗く端株もち  
病人に朝刊来たと起こされる  
朝刊へうちの会社が焼けていた  
朝刊を重役室でゆつくり見  
日曜の朝刊牛乳とも盗られ  
朝刊へよんべの事故を探して見  
朝刊のどこかにあった訓話なり  
皆送り出して朝刊母が読み  
閑職の椅子で朝刊読みつくし  
朝刊をもつて焚火へ背をむけ  
朝刊がはさまったままだが当り  
朝刊にをまげつくとトースター  
朝刊のスボーツ欄は子に持たせ  
勤評如きに朝刊こう食われ  
何時起きても朝刊ちゃんとい  
朝刊の相談欄が妻の趣味  
二階借り就職欄を読みに来る  
朝刊を屏に敷いてる外野席  
朝刊を指名犯人待ち兼ねて  
朝刊を見たかと事務所騒いでい  
朝刊が来て寝しずまるお茶屋筋  
朝刊で選挙参謀引っぱられ

#### 兼題「憂うつ」 北川春巢選

紅バラを切つて憂うつまざらわし 寿栄  
憂うつな顔で汚職に名を連らひ 雅巢  
憂うつな留守物売りにねばられる 八九寸  
縁談を妹ばかりに持って来て 静馬  
見出しまで入れて左遷の記事にされ 茶仏  
金のいることばかりで憂うつ 亜鈍

憂うつな見合いしぶよつて来る 堰子  
憂うつをまざらす紅と知る鏡 知恵美  
言い勝つてから憂うつ顔になり 幽谷  
憂うつな顔へ二号として化粧 貴山  
憂うつな夏手袋が汚れている 薫風子  
憂うつな顔へ蠅までたかりに米 求女  
人間のわなに掛つた憂さを飲み 一乃字  
憂うつのかさきに押した言判 省三  
逢えぬ夜の雨はひと入気が減入り 梅里  
薬局も憂うつな顔で聞いてくれ 堰子  
憂うつのかさき雑沓にただ採まれ 旅風  
憂うつな原因おんなじ嘘を言い 水鏡子  
くさるなど洗濯好きへ晴れてる 宏子  
憂うつな雨も新婚又たのし 句念坊  
年頃はこんなニキビに気がぬけり 漣  
憂うつな話は妻に任せきり 文秋  
青春の憂さはドラムで吹っ飛ばし さんたく  
憂うつな顔をするなどくだ巻き 文秋  
憂うつに見せて彼氏に甘える気 花車  
眼帯の憂うつ石にけつまずき 豆秋  
憂うつな耳へ逆らうようにジャズ 南宗  
薄給の憂うつウインドから離れ 牧人  
病気かと聞けば不渡り出して見せ 堰子  
憂うつな顔へは猫も寄りつかず 春巢

#### 兼題「水虫」 水谷竹莊選

水虫だ失礼をする横ずわり 茶仏  
湯治場で水虫同士うまが合い 圭井堂  
薬局も僕の水虫には困り 高史  
水虫かいなと同情もして呉れず 文蝶  
水虫の葉へ広告程きかず 井平  
水虫やないかと終い風呂にされ 省三  
水虫を湯舟の陰で掻いて 与呂志  
水虫の娘にサンダルをねだられる 白柳子

下駄服で来て木虫を見せて去に 梅里  
 木虫もものち颯爽とハイヒール 好郎  
 木虫が足を上げて終い風呂 省三  
 木虫になって素足が好きになり 木鏡子  
 木虫の指で毒の粒をより 陽子  
 木虫の広告を見てかゆくなり どんたく  
 木虫の足ふくタオル白すぎで 一乃字  
 木虫の治療父と子顔を寄せ 春巢  
 会議中木虫いやにかゆうなり 博也  
 看護婦でさえも木虫持てあまし 須賀太  
 木虫に耐えて地下足袋よく稼ぎ 水鏡子  
 木虫の薬で会社もちなおし 一十  
 夏が来た又木虫が顔を出し 周甫  
 下駄はいて来て木虫ふいちょうし 一飄  
 木虫のお蔭で新築儲けてい 繁雄  
 御機嫌になって木虫痒くなり 雄声  
 しもやけがすめば木虫とはせむし 一三夫  
 また違う薬を木虫探して来 求女  
 蚊帳つた外で木虫掻いている 白柳子  
 木虫ではじめて知った下駄の味 善弘  
 木虫の話を聞いて掻ゆうなり 与呂志  
 ものすごいなあと木虫のぞかる 博也  
 足投げて旦那に木虫みてもらい 一三夫  
 木虫同士いたわり合っている社内 いわを  
 木虫が気に入りタイプミスを打ち 淡舟  
 木虫を女きたないように言い 潮花  
 下駄ばきで木虫悠々と出勤し 圭木  
 木虫のかゆさお茶席気が重し 宏子  
 木虫の薬へ立て膝わるびれず 一三夫  
 木虫の薬どれが効くのか効きあらず 句念坊  
 木虫の手当も日課の中に入れ 春日  
 木虫を掻く快感が忘れられず 雄声  
 木虫がムズムズ痒いお茶の会 豆秋  
 木虫のかゆさ忘れた嬉しい日 竹荘

立ち話雨の歩道を覗き止めて 旅風  
 肩抱いて歩道に靴を鳴らし行く 一十  
 自転車歩道を歩道へ回す地下工事 連  
 歩道から三軒奥へ囲われる 三林坊  
 よう似てる後姿を追う歩道 牧人  
 妙法蓮華経歩道の隅の風に立つ 木客  
 これはこれは山上さんへ行く歩道 一飄  
 乳母車歩道二つにさいて行き 木堂  
 石ければ歩道は朝の音をたて 潮花  
 待つ人は来ずに歩道は雨を聞き 六竜子  
 プラカード一人歩道を逆に来る 花車  
 歩道から外れ竹の子見つけてき 木客  
 木薬屋歩道ここまで匂わせる 栗  
 歩道から歩道へ老の必死なり 花車  
 歩道から歩道へ老の必死なり 花車  
 予算難らしい歩道が途切れとり 麥福子  
 人気がないビルが歩道へのしかり 園男  
 救急車歩道のみんなふり返り 白柳子  
 歩道まで積荷はみ出す釘の音 好郎  
 肩組んだ若さが歩道からあふれ 立見  
 誰か待つ歩道の見える喫茶店 一三夫  
 医者からの帰る歩道の陽がさつ 形水  
 柳の芽歩道は二人だけの巾 三司  
 盲目の勘が歩道の巾を知り 鴨汀  
 借りた気の易者歩道へ水を撒き 三司  
 コトコトを押して歩道へ満二つ 奈良子  
 パラ好きの前で歩道がせまくなり 梅志

席題「本店」 清水白柳子選

支店はないと本店に書いてなし 文蝶  
 本店まで麻雀好きが聞こえてい 圭木  
 本店を經理事務所においた知恵 高志  
 ホーナスの高が本店からパレる 一三夫  
 本店へ戻って定年近うなり 十悟  
 本店の空気がなれてきたタバコ 木堂  
 本店の犬だけが尾を振ってくれ 豆秋  
 いざストとなって本店引きずられ 一三夫  
 本店の時計明治の音で鳴り 春巢  
 本店をかさに横車の人事 七面山  
 二代目に仕え本店の生字引 梅里  
 本店へ帰れるらしい噂きく 一乃字  
 本店営業所工場倉庫同番地 繁雄  
 本店はまだ冷房をつけとらず 立見  
 本店もあるらしい角のタコ焼屋 一求  
 本店へ変るさかいにおごらされ 博也  
 月給を上げて支店へまわされる 三司  
 本店がうるさいのでと貸付けず 好郎  
 一寸した事本店にまで知れ渡り 一乃字  
 本店から行けば支店は野趣に満ち 月都  
 本店の腰ぬけ共と藤で言い 多久志  
 へまな奴又本店へ呼び出され 一十  
 本店で買えば割引して呉れず 文蝶  
 本店で泊ったことになっており 飄太  
 本店を知らずじまいで首になり 省三  
 本店へ勤めるシャツの白さなり 牧人  
 本店の夜業が続く賞与月 省三  
 本店は何にでも判捺したがかり 春巢  
 本店の見える手前で車降り 鴨汀  
 本店へ来て受付は顔なじみ 梅志  
 長距離の本店らしい話ぶり 奈良子

席題「ノイローゼ」 土井文蝶選

ノイローゼひとの血圧はかり訊き 多久志  
 ノイローゼへ爆発記事からノイローゼ 連  
 上り湯を倍ほどあびるノイローゼ 立見

ノイローゼ頼みの金が切れれば 鼻声の電話へ妻のノイローゼ  
 紙屑も手形に見えるノイローゼ  
 ノイローゼがノイローゼを笑って居  
 交番の御世話になつてノイローゼ  
 ノイローゼ自分の病氣棚にあげ  
 おつさんもノイローゼかからかわれ  
 信心をすすめられてるノイローゼ  
 避難業しくじつてからノイローゼ  
 静養に行くのが怖いノイローゼ  
 ノイローゼもう神様も信じない  
 別嬪にみんな見えますノイローゼ  
 ノイローゼ地下も高架も危なかり  
 校長の夢は講堂焼けた夢  
 ノイローゼ地も高架も危なかり  
 宿直が非番も呼んで飲みあかし  
 ノイローゼ薬つぎつぎ変えて服み  
 ノイローゼ落ちてくるように思うノイローゼ  
 天が落ちてくるように思うノイローゼ  
 ためすぎた揚くの果のノイローゼ  
 聴診器に見はなされてるノイローゼ  
 医者薬お灸と迷うノイローゼ  
 ノイローゼ鼻緒の燕う下駄を履き  
 ノイローゼやなんて頼りにしてまつせ  
 手を洗って洗って夫人のノイローゼ  
 疑えば妻の愛さえそららし  
 ノイローゼ陰では気狂いださ云われ  
 吸殻を消しに戻つたノイローゼ  
 ノイローゼ鳥が鳴いたのを気にし  
 奥さんを信用しないノイローゼ  
 裏の錠閉めたかいた又起きる  
 ノイローゼ白い日記がつづくなり  
 ノイローゼ又薬局の戸をたたき

席題「人柄」 直原七面山選

ニコヨンになれぬ人柄もてあまし 圭木  
 顔よりも人柄よりも持参金 好郎  
 元課長という人柄へ役がつき 淡舟

兼題「歩道」 後藤梅志選

華族の出入りく笑顔に残る 蔭 飄 太

人柄をほめて顔にはふれて来ず 文 秋

人柄は死んだ親父に似てやさし 一乃字

人柄が信じ切れない世をなげき 与呂志

人柄は共産党に惜しい人 多壮志

人柄がどうあるうとも好きは好き 竹 莊

人柄がよすぎで女難の相がある 竹 莊

お上品に見せてもおき直ぐわる 圭井堂

人柄の順に 鹹首〇をつつけ 十 悟

永住の家教え子が建ててくれ 須賀太

お人柄よりお金ですわとドライの娘 狂 二

人柄に自信をもつて又振られ 省 三

あけすけな人柄胸毛まで出して 凡九郎

人柄をほめて盃おしつけ 潮 花

本心は打ち明けられぬお人柄 恒 明

損得は別人柄が慕われる 牧 人

人柄を女酔わせてたしかめる 舟 遊

亡くなつてから人柄をほめてくれ 柳宏子

人柄をほめられ古い人にされ 一三天

人柄がシャンシャンとさまめあけ 凡九郎

成上り者と人柄見 抜かれる 淡 舟

立候補みんながさせたお人柄 須賀太

損ばかりする人柄で親しまれ 千里

人柄にほれて利息をまけておき 義 弘

人柄と寸分違わぬ太い文字 青 風

人柄の良さがお通夜の隅に居り 梅 志

人柄をほめられ貧をあわれまれ 一 飄

落ちぶれていてもどこかあるゆとり 晃

人柄と別に男にある浮気 圭 木

人柄が又仲人を頼まれる 須賀太

八方によい人柄で喰い足らず 一 十

人柄に惚れて体を張った恋 潮 花

人柄は零です前科五・六犯 七面山

(庸佑清記)

川 雑 淀川支部句会 (大阪市)

社交のような顔で見合の席に座し 武部香林選

先ず酒の味から社交術になり 陽 子

子の嘘の可愛らしくも叱つとき 幽 谷

病む妻へ心でわびる嘘をつき 三十郎

ええわいな嘘でも書いと夜所言 文 児

袖の下ちやんと予算に組んであり さぎす

心得た顔で受取る袖の下 梅 翁

夫婦して値ぶみしている袖の下 東洋男

落ちたので親しみ易い人になり 若 菜

御同情を謝して落選寐てしまい 水 堂

落選をして広過ぎる奥座敷 花 村

落選をして広過ぎる奥座敷 香 林

川 雑 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

ライバルの靴が光って居たひげ目 堰 子

遠来のライバル天皇杯はるか 淡 海

だまされていても女の嬉しい日 太 路

つけ黒子不倫な事をたくらめり 晃

女房のほくろの数をよんでみる 蘭

泣はくろ三十才を一人居る 満 潮

つかまらぬうなぎ落語の面白し 漣

未だ切れぬ電話へうなぎ燃を居る 六童子

うなぎ焼くとこを覗いて寿司にする 玲 人

上ママシ大きな声で言うてくれ 柳宏子

鰻屋でうなぎ鰻の匂い嗅ぎ 貴 山

花嫁へ猫も紹介されるなり 雄 声

やりくりをしても花嫁たのしもう 利 幸

花嫁は一〇 糶程背高なり 句念坊

花嫁と火事は迷さず見に行き 敏 子

花嫁の当座は笑うことばかり 白柳子

借用書書き心にもない世辞をいう 昭 夫

気がわかつて女隙を見せ すゝむ

励ましの憎い言葉でない心 鶴 汀

初対面個性も少し心して 北 州

心の眼開いてやったと教祖言う 愛 子

心まで撮らないからいいカメラ 旅 風

老婆と以心伝心あくびが出 薰風子

宿命のライバル顔が明るいな 梅 志

川 雑 にしなり支部句会 (大阪市)

暗がり峠より生駒へ 吟行

後藤梅志選

ビツクリハウス僕の眼玉がまわりまう 慎太郎

山道を携帯ラジオがされちがひ すゝむ

鶯に足の重さを上げまされ 文 秋

山蟻の脚の軽るさも急な坂 旅 風

鶯へ峠の茶屋をのこして来 薰風子

ハイキングナイフは切れぬものよめ 省 三

六月の陽へバラソルの赤がよし 梅 志

鶯の趣味あり春を背伸びして 水 客

川 雑 阿倍野支部句会 (大阪市)

菊沢小松園報

母の手を離れて走る一年生 葉 光

舞台裏ごさの隙間を通る風 亜 純

舞台裏作者うれしい拍手聞き 好 郎

花札が散らばっている舞台裏 恒 明

大騒ぎしてから迷い児札をつけ 文 秋

投票の時だけ俺は偉い人 十 悟

真剣な顔がならんだ投票場 栄 子

淡々と日やとい投票済まして出 堰 子

誰に投票するねんやと妻にきいて見る 豆 秋

川 雑 玉造支部句会 (大阪市)

徳永雅美報

いつまでも無邪気な娘で気をもませ 柳宏子

もう二十才と云うているのにまだ喰い気 清 子

折かぶと竹光抜いていざまいれ 井 平

日曜の料理嬉し共 稼ぎ 一 栄

料理の腕で浮気が封じられ 文 秋

一人子で育ち無邪気さ振り切らさ 章 子

無邪気さを課長も笑う新入社 清 子

新妻の料理途中で読み直し 井 平

川 雑 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

四十過ぎ叱って呉れる母があり 善 坊

母の一生心配ばかりと言ふ暮し 舟 遊

感情を押えて母の顔になり 罔 男

結局は母のしつけのせいになれ まこと

母の日もやっぱりせわしたすき掛け 川太郎

母親の外泊珠数の要る用事 夢 路

無学でも社長となれば偉い人 三 舟

学のない事も自慢と言ひ出世 すゝむ

大阪を学べと夜を連れ歩き 鶴 汀

無学だが苦勞人として親しまれ 鬼 美

浅学や非才が談席占めんとす 知 司

才たけた美人冷たく嫌きおくれ 江 司

共演の美人の方が役不足 かん坊

その中の質屋の傘が時代めき 弦 月

傘さして歩いただけのスキヤキ 文 女

傘さして牡丹へ立てば詩人めき 薰風子

軍隊で入れた根性で振る 赤旗 龍 遇

好きなのに好きとも言わぬ根性悪 酔 月

お隣りの垣バラ根性悪く伸び 和 子

根性のまがった方へ肩を持ち 大 部

再婚の見合団扇の風をやり 東 雲

転落へ無情の風がつかまとい 慧 星

春の風金もないの誘いかけ 憲 一

風の音病床の身を孤独にし 光 子

母さんの留守は淋しい風の音 文 女

紫煙だけ残して会議終了し 丹 謡

川 雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

古川麗花麗報

サーカスに村の掛小屋思ひ出し 風 草

青春の思ひ出ほけて色がさめ 弦 月

思ひ出は二人の胸にそつと秘め 桂 馬

思ひ出は砂糖耕地の荒仕事 いろは

今更に明治のよさを思い出し 出山  
 思い出の数を重ねて五十年 先平  
 ひとしきり聞かされやと 思い出し 虹橋  
 時忘れ思い出語る 父若し 美潮  
 故里の思い出多し 帰化市民 いつ生  
 花便り思い出を追い庭に 侍つ 富美代  
 思い出はあわし懐し 四十年 惠津子  
 思い出は初めて 抜けた句の活字 迷朗  
 在りし日思い出し 自責する 凡平  
 思い出が險にうるむ墓に 侍つ 泉水  
 風竹は折れても 残す根は枯れず エス子  
 風竹の遺せし 柳根 弥栄え 氣七有  
 風竹の語父よりきかされる 八丁廻  
 風竹が飛ばす 獸酒落も墓の下 浪之助  
 君ぞ来て句の座につけよ 風竹忌 斧平  
 句座の灯に 佛しのが 風竹忌 柳葉  
 風竹の手植えた 柳良く 繁り 曉舟  
 思い出は つきず 語るう 春の 宵 快夢起  
 イメージは まだ 生きて いる 飲みつ 振り 草一郎  
 あれからも う 一 昔 墓の 苔 魔法麗  
 忠臣蔵 ひと き 偲 ぶ 風竹 忌 北海

川維 備前支部句会 (岡山県)

創立十周年記念大会

三村柳風子報

助太刀の妻にあとからひねられる 桃里  
 週末に帰る田舎がある 強み 柳風子  
 田舎へは御無沙汰をして つめ 差 矢寸志  
 縁に出て 田舎の星を大きく 見 淡舟  
 見晴しのいいと 他人の家が 建ち 万女  
 満月を眺める子供に 母が ない 陽子  
 ポツカリと 親父の顔が 出る テレビ 潮花  
 テレビかけたまま 紙芝居に 飛んで 行き 美喜  
 色が つき出して から テレビ 買って 子に 教え 清春  
 テレビ 買って 落ちて 目 逆う 氣 紅月  
 ロカビリー 時々 テレビ から ちぎれ 与呂志  
 テレビ から 足を ふまれて 帰って 米 久米雄  
 テレビ で 見た と 年寄 負けて いる 春 巢  
 十年の 汗新築 へ 灯 が ともり 運平子  
 十年の 一日の 如く 庶務の 隅 知恵美  
 十年を 弁当 函に 励まされ 流風  
 十年を 惜しみ 弔辞の 中で ほめ 只也  
 十年も たつて 防空 壕に 住み 正洲  
 十年も 前も おんな じ顔で 呑み 句念坊  
 十年も 延びた 寿命 へ 灸を すえ 伊久野  
 若草は 踏まれて も 尙 立上り 旭川  
 女生徒の コーラス 若草 へ 来て は ずみ 里風  
 若草に 転んで 居たら つい 撮られ 三六  
 打ち明ける 方も 若草 むしり とり 一善  
 若草も 悩みの 靴が 踏みに じり 魔い心  
 煤煙の 中で 若草の びて 行き あやめ  
 棚ぼたの そんな 話を 信じ まい むじな  
 神棚は 喜怒哀楽 の よりどころ 捨鉢  
 もう 棚へ 上げて 愛想の 悪い 事 保夫  
 神棚で 頭を 打って 氣に かかり 秋月  
 熊ん 蜂 藤 棚へ 来て あわて させ 葵丘  
 神棚へ は こりを 蓄めて よく 儲け 三林坊  
 女医さんが 患者の いたい こを つき 季贊  
 浮気ばい 良人 へ 女医 も ノイローゼ 承平

川維 下関支部句会 (下関市)

石川侃流洞報

看護婦の恋へ冷たき女医の言 七面山  
 生涯を 聴診器に 託し 女医 老ける 六竜子  
 重忠へ 徹夜の 女医の 紅が 褪せ 美音子  
 人通りまで 女医 送る 夜の 道 柳瓢子  
 どこ 痛い 女医さん ママの 声に なり 喜三郎  
 婚期 など 氣に せぬ 女医で 三味が ひけ 永断  
 スクーター 女医は みる はずを 除けて 乗り 鉄人  
 急患に 女医の 素顔の 有難さ 周甫  
 頭数 見て から 鯛の 身をおろし 味平  
 刺身皿で かいが 鯛は ただ 三切れ 雷山  
 急に 数増えて 刺身を 薄う 切り 桃仙坊  
 あれほど 飲んで 箸は 刺身 へり だけ 遠二  
 隣席の 刺身も 食べて 酔って いる とら平  
 海豚 刺身 スリルの 味も 尋ねられ 白水  
 珍客に 刺身 庖丁 赤く 錆び 風の子  
 お刺身は 河豚で すの よに キョウ とし 真奇  
 鯛 鯛 鳥 賊の 刺身に 迷う 箸 藤波  
 誕生日 刺身も ついて 妻の 酌 旭峯  
 食え 食え と 妻にも 河豚の 刺身皿 東岸  
 片方は 刺身 になって 売れ 残り 駄流児  
 お刺身の 魚を 聞いて 食べて おり 永流  
 李ラインくぐった 刺身とは 知らず 山彦子  
 今朝の 記事 皆んなも 刺身 だけ 残り 天水  
 追加 刺身 一片 ずつ 減らし 方大  
 板前は 庖丁の 腹で 刺身 食い 平平  
 山の 湯の 刺身は バスで 来た 魚 久雄  
 二次会 へ 刺身 食べた 折を 掲げ 浄美  
 即興の 画筆が かりる 刺身 皿 腹乃

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

川維 倉敷支部句会 (倉敷市)

相原一善選

拿捕された後は 静かな 波の 音 慈雨  
 拿捕されて 日本人を 意識する 雷峰  
 拿捕の 父へ 便りが 書ける 子に 育ち 陽子郎  
 珠数 持てば 君も 善人と 思うかい 粗影  
 底なしの 善人寮の 管理人 千里  
 貯金 つけば 小さい 夢を 持ち つつけ 翠月  
 計画の 貯金は 倦怠 期で なく じけ 四郎  
 こちら 雨ですと 先着から 便り 九呂平  
 先着は もう 絶景 へ カメラ 向け 豊年  
 監督の 六感 ビンチを 切り 抜ける 伊三男  
 監督の 波面 せつと 覗いて み ほなみ  
 真つ 先に 汚れる 監督 親しまれ 侃流洞

狼狽の 跡 歴然 と 口の 端 句念坊  
 ビビビビ 赤と 氣付いた だま なんか 鳥雀  
 ぞうり 履く 靴屋のおっさん 木虫 尙平  
 創立以来の 御用と 靴屋の 自慢 親生  
 膝におく 両手が ものを 言っている 司郎  
 飯を 食う その 時 両手 意識 せず 晴芽  
 母さんは 留守 という 頬こけ ばら せ 紫蘭  
 留守 番も たまには よしと 一 升 瓶 九角

愛人に 似ている 人に 酌ぎ こぼし 方大  
 背中にも 目がある 様な 姑さん 谷水  
 ハイボール 女の 肌が 浮きあがり 万古  
 赤線 消滅 する 商品で ない 身体 春日  
 お叱言は 御飯が 済んで から に して 一善  
 男性を しりぬ にかけて ハイボール 麗木  
 いっぱい に 淋し さ 背中に 丸めて 居 銀子  
 ハイボール 女 少々 では 酔わ ず 素身郎  
 大あくび 叱言の 出鼻くじい とき 平平  
 商品の 骨董品を 売り 惜み 狂風

又叱言出そう社長の朝早う 飴ン坊  
 空裏にはやられ署では叱言きき 広志  
 ハイボール逢えない憂き晴してネ 隆文  
 ハイボールあきらかに干き和服の娘 鳳月  
 商品じやありませんと嫁きおくれ 幽谷  
 ハイボール味も知つて嫁きおくれ 陽子  
 安サラーいねれと目付付豪華品 萌芽

雑 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

こんなです毛布の見本もぞ見え 枝葉  
 サンプルで先ず奥さんを攻め落し 一雨  
 サンプルのように仲人写真出し みのる  
 裏表見てから寸志封を切り ゆたか  
 頼みます裏と表の二枚舌 よし子  
 神殿の裏へまわれれば味気なし 秋月  
 見本なら貰つておくと如才なし 宗悟  
 母親の方を見て舞う 幼稚園 永断  
 矢車が舞うたび鯉も息を吸い 左文字  
 チンドン屋派手に舞うてる本通り 越山  
 チラツチラツと秋波を送る舞扇 ひか平  
 春や春蝶は陽気に舞うばかり 無鬼  
 商魂の見本どうぞと郵送し たけし

雑 岡山支部句会 (岡山市)

津田麦太楼報

イブニングモードを着てる柳腰 万女  
 赤線の名残を秘めて柳垂れ 陽子  
 雨の夜柳が傘をすつと撫で 幽谷  
 五月雨を見て算盤へ顔を載せ 矢寸志  
 龜の背に乗つて蛙の日向ほこ 麦太楼  
 藤棚の下は園児にかしてやり 葵丘  
 藤棚の下へ日傘を忘れて来 一声  
 帰郷した夜を蛙に寝つかれず 晶晶  
 五月雨の愚痴受付は順に聞き 飴ン坊  
 夜の道食用蛙におどかさされ 秋月

新築のプラン柳を頼りかえし 美音子  
 蛙鳴く里方に来て 朝寝する 十七  
 おんぶした蛙が居るとママを呼び 承平  
 妻の座を柳に風と守りぬき 半翁

雑 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶仏報

足音に見せる怒りを見送られ 錦木  
 冬越しの金魚一ミリ程ふとり 魚山  
 軽卒を責めて相談欄は逃げ 正柳子  
 解決に何か下心ありそうなる 吉枝  
 解決を迫るあせりを見逃さず 宗太郎  
 解決案蹴つて労働歌高らかに 松木  
 スト解決電車ノソリと車庫を発ち 芳朗  
 解決がつかず雑魚寝の泊りがけ 美乃留  
 解決の鍵握る人座に居らず 美和子  
 床屋から出れば日曜雨になり 茶仏  
 刈り上げる型を鏡の客へ聞き 桜人  
 散髪もしてソツのない受け答え 茶の香  
 剃り立てを麦を渡つた風がなで やすえ  
 毛の濃い頃も知つてる散髪屋 幸路楼  
 散髪屋挨拶だけの朝で足り 香径  
 顔を剃る妻の指先ネギ匂う 寿美絵

雑 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満報

軽石と言う石もあり水に浮き 八歩  
 石蹴れば石も生きてる音がする 若人  
 石入れて貰つて狭い金魚鉢 同  
 石段の高さ信心ためすよう 日満  
 機密費にうっかり触れてしまふ 三歩  
 信念があつて投票よろめかず 八歩  
 投票へ軽い返事が案じられ 日満  
 兄弟で飲む日へ母も来て坐り 星影  
 けんかした頃の兄貴が懐しい 多可志  
 故里の兄が兄がとたよられて 耕民

イデオロギー兄と違つた道に生き 同

雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選

お寝巻を着れば理性は打ちやられ 影花  
 寝巻着せ掛けながうたつた寝をしまり 仏道  
 無代漁屋欲の皮が引つかかり 天作  
 茄子の色うっかり寝巻のままで出 粗影  
 珍らしい間チャホヤされた恋 雪峰  
 人間の欲が無料へ押し寄せる 豊年  
 説経の鐘に会葬向きなおり 千里  
 会葬へ隣の珠数を借りて立ち 晃  
 魚屋へ八百屋へ珍客走らせる 詩辭痴  
 新しい寝巻覚悟の手術台 嘉次  
 基地の朝手を振る寝巻の娘が二、三 茲雨  
 母だけがつぎはぎされた寝巻でい 九呂平  
 急患へお医者寝巻で脈を見る 司郎  
 会葬のまだまだ続くお人柄 伊三男  
 動物園入場無料の子に引かれ 蘇人  
 会葬の二号目立たぬ席で待ち 藤四郎  
 無料という魅力が寄せた人だから ほなみ  
 飛び出してみたが寝巻で歩かれず 樞川  
 会葬の後列お義理が来て並び 侃流河

雑 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

玄關の予想崩れる顔が見え 洋介  
 表情は話の中に折込まれ 明暗  
 度が過ぎた表情浮気を感ずかれ 幸夫  
 いやな人へ表情変えまいと努力 迷調子  
 保護願ひ予想はずれて欲しい母 明朗  
 表情を変えず女のよく話し 隆昭  
 ダークホースなど予想の輪をまろげ 綾美

雑 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山報

汚れたる枕気にせぬ独り者 周甫  
 主の首のせて嬉しい膝枕 美沙  
 子の意地が迷々枕濡らして寝 只世  
 ブレーキは貴方に任す膝枕 承平  
 手枕を信じ切つてる子の寝顔 薄仙  
 虫も殺さぬ顔で抜け目の無い手管 千年  
 空涙流す手管にもう乗らず 喜楽  
 手管とは百も承知で乗つてやり 流風  
 不貞寝した後の気拙さ意地で押し 一草  
 空腹をぐつと耐えている不貞寝 賤女  
 耳打が波紋を呼んだ隣組 南飲  
 耳打の通り大臣答弁し 竜兒  
 格程にホテルサービスして呉れず たつよ  
 女将もう心得顔にいるホテル 知恵美  
 絶景へホテルどつかり坐り込み 夢兒  
 ホテルからママと出て来て千鳥足 水雲  
 うらぶれの身に温かそうホテルの灯 七面山  
 屋台店曳目程遠いホテルの灯 喜久枝

雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

子の自慢こわしたくない母の夢 水鏡  
 同性に優越感をもつ自慢 雄々  
 自慢した嫁がだんだん気に入らず 美喜江  
 姑の自慢へ嫁のレジスタンス 奎  
 古くさい自慢ばかりの年になり 天邪鬼  
 自慢する口元までが親に似る 節枝  
 隠し芸自慢ののどを出したが 君枝  
 自慢した式の晴着が借衣裳 一机  
 二次会になれば課長も君と僕 春秋  
 上役の自慢真面目な顔で聞き 紅帆  
 ご自慢を言いに来るから聞いてやり 春香  
 一升酒飲むご自慢のクラス会 庄太  
 ご自慢は貧乏しても子が達者 十七  
 先妻の子を自慢して義理を立て 無閑  
 PTAわが子の自慢して帰る 千柳

自慢するほどに淋しい意地がある  
ライバルは美男子僕は金があり  
僕と言わずシスターがイ化粧する  
妻からの自慢話を背で聞き美笑

川 高知支部句会 (高知市)

川竹松風報

禁鳥と知らず小鳥は飛んで逃げ 一枝  
焼鳥の味も知ってる愛鳥家 温夫  
就職もきまらぬ内に卒業し 鶴亀  
卒業の名簿寄附帳とも見られ 実  
卒業の子を喜んで母は老け 酔雀  
物言えぬ実母が来てる卒業日 俊一郎  
よろめきを見あきたように散る桜 蟠蛇  
よろめきへ女算盤はじいてい 幸陽  
収骨船煙を残し帰途につき 義生  
よろめかす気のお化粧に念入れ 松風  
よろめきへ桜ひらひら散っている 迷窓

杏林川柳会 (大阪市)

すれ違いの縁が金婚式も挙げ 珊枝郎  
すれ違い心齋橋がせますぎ 生々庵  
すれ違いさせて作家は食いつなぎ 一伸  
すれ違うだけで嬉しい気の弱さ 小石  
こんな小さい猪口でうらか気いらす 生々庵  
またしても返事が待てず行き違い 一哲  
背筋を立ててせっかち順を待ち 珊枝郎  
細腕のすこざ別れてからわかり 阿茶  
お名指しをまわりきれない腕達者 同  
女の子出来て嫁入りもう案じ 小石  
趣味の自作の人形うり惜しみ 腹乃

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

小沢史葉報

週刊紙表紙の良いのを買って決め 八十子  
週刊紙時のテーマを見迷さず 春雄  
週刊紙で仕入れたくせによく喋り 同  
また次が読んで置いとく週刊誌 草右  
週刊のクイズへ家族の眼が揃い 同  
週刊誌アクセサリーに丸め持ち 志乃夫  
週刊誌買った日がクイズの締切日 賢治  
狸寝の膝より落ちた週刊誌 方正  
闘病に慣れて待つのは週刊誌 同  
週刊紙女性心理を書きたてる 桃村  
五人目が男で無理する鯉幟 同  
鯉幟りビルの谷間にも泳ぎ 史葉  
タイトルに鯉幟りも出るテレビ 同  
親の見得無理してあげた鯉のほり 竹莊  
鯉幟り月賦であげたとは知らず 同  
鯉幟り買ってから雨の日が続き ひろ子  
週刊誌詰碁は先に答を見 没食子  
週刊誌クイズは出来ただけで止め 同

南海電鉄川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

包紙敷いて花見のお弁当 晃  
羊かんとてつきりわかる包紙 梅志  
甲斐性無し辻の八臂で又迷い 狂二  
甲斐性ない話パーマをあてながら 宏子  
ほれた弱身甲斐性があるように見え 圭木  
銀翼に命を賭けて羽田発ち 南宗  
派手に手をあげて空港颯爽とのぼる 晃  
御秘仏はいと淫らなる御姿 晃  
ご本尊暗さになれた目でみつめ 梅志  
本尊はミイサンきれいどが好き 雄声  
美術価値只それだけの御本尊 貴山  
御本尊修理中とは書いて無く 旅風  
本尊へにせてであろうが手を合わし 路郎

333川柳会 (堺市)

川村好郎選

あわててる証拠にモモが見つからず  
研究会メモして帰りそのまんま  
自信ある顔がつめたたいパスガール  
顔貸せというてはみたが恐くなり  
連休をさせて行楽する身分 冗歩  
雑沓の記事だけ読んで連休日 雄声  
連休へ妻のプランも聞いてやり 狂二  
芸はまだ老いず舞台を吹り見せ 好郎  
舞台より二合瓶が気にかかり 一栄  
出前持チヨット舞台をのぞきこみ 南宗  
附添いの方が注射をされる顔 一栄

川 婦人友の会 (大阪市)

三周年記念大会

丸尾潮花報

靴ずれの素足へ宿の下駄を借り ともよ  
インテリの無力な男持てあまし メ女  
山登り自慢の素足フトがさし 悦子  
素足の快感かげろう燃える道 若芽  
宿願に世話のやける小半日 徳子  
店員としてのお世辞に気が疲かれ 花鶴美  
待来後半日へ期待かけ 花奈女  
逢いに出た素足の病後いたわれ 初穂  
栄えたは養子の腕にしてくれず ひさみ  
貝拾う素足日傘の母といる 明美  
聞き流すお世辞青春の日日 史子  
初恋のひと思い出す桜んぼ 奈良子  
故郷の草に素足をなぶらせる 俊江  
親よりも栄えてほしい子を育て たつよ  
妻の留守半日飲んで来るつもり 沙智子  
そんなこと言いつつお世辞のせられる 章子  
引揚げて嬉しく畳踏む素足 都詩子

ブラットは素足で送る妓も交り 葉乙女  
美粧院男恥しそうに待ち 登志子  
大掃除男の力ほめておき 花代子  
みえすいたお世辞(フツ)と横を向き 小石  
チヨットピリと世辞も言えて親がなし 吟女  
もう一度男になれと貸してくれ 一栄  
ほんと胸たたいて男まかしとき 操子  
手離した店の繁栄見て通り 幸永  
特売場男は隅で待たされる そと枝  
ぎこちない手つきで抱いた男親 富士子  
繁栄を讀え初代の除幕式 梨花  
素足ふと舞台の冷えを意識して 千代美  
商売が栄えて旦那は二号宅 白美  
つぎつぎと奥へ建て増す栄えぶり 宏子  
家建てて祖先へ告げる灯をともし 梨里  
お世辞ではないかと話切り出され 良子  
流行へ一足早い娘の素足 春栄  
本当の情にふれた男なく 美恵子  
さくらんぼルルル回してまだやべり 陽子  
半日は空っぽのまま社長室 清子  
つまらない世辞を逃れる控室 ささ子  
むつつりと男やきもちやいて 阿茶

鮎と料理と酒  
アベノ橋地下映画食通街  
千日前 大劇裏  
梅里の店  
★大万川柳(第八十九回)を募る  
兼願「脱線」路郎先生選  
締切 七月十五日 句数五句以内  
発表 七月廿一日 (店内掲示)  
投句は 阿倍野区松崎町三丁目  
一〇 大万川柳会宛

# 大萬

### ● 編集録音 ●

▼梅雨の入りの夜、話題はずでに八月号九月号のこと。海水浴の水木ももうしまいかかる頃である。雑文の原稿も川柳塔や近作柳樽の句稿もそのことを頭に入れてほしいものだ。八月号にも九月号にも芯になる記事が用意されて一段と見ごたえのあるものになる、御期待を乞う。

(古方)

▼面白い話題が次ぎ次ぎとび出して、先生も涼しそうな粋なゆかた姿だ。女の話や色々の終りにはトイレにまで落ちて大笑い。(竹莊)  
▼アンケートを求めてその回答が気に入らないからといって、ケナシつけるのは、たとえそれが第三者であっても、読者として気持ちのいいものではない。回答者に対する礼を失ったような気がする。遠慮のない川柳人であっても、人間の社会には礼というものがあつて、犯すものは必ず己れにかえってくるもののようにだ。

## 柳人交歓暑中見舞廣告を募る

八月号へ貴方の暑中見舞廣告を  
★一口金二百円。幾口でも申込んでください。  
★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。  
★一口分は五分の一段組三行。  
★原稿締切は七月五日着便  
★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

▼前号は、どたん場になって、印刷所からの初校のゲラ刷がモタつきました。三校から四校もとる時さえあるのに、六月号はそんなわけで、初校で責了にしたペーじもあつた。これは、遅刊しなかつたうら話である。  
▼伊志田孝三郎氏の「言葉のあや」はテーマが誤植のことだったのに、こんどは私が氏の句を誤校してしまつた。氏から「言葉のあや、統篇」を「活字のいたすら」というタイトルで、私に、何かシャレたものを書いたらおもしろからうと、すすめてくださった。こんな明るい気持ちでお叱り(ではないが)をうけたのは、正直こんどが始めてのことである。

近頃一寸こんなことを感じたのでちよつとふれておく。(梅志)  
▼郊外では雨の中を麦の収穫がたけなわ。川柳家には穫り入れが毎月ある訳だ。月の初め川柳雑誌を手にして、豊作に満足する毎月であり度い

のだが。雨の夜の編集会議の企画で、七・八月号をからりと晴れたものにし度い。(薫風子)  
▼毎年七月号を路郎主幹の誕生記念号として、昨年の古稀特集ほどの特別号にする夢をもちつづけている。  
▼本号の表紙はどうであらうか。難と欲をいえはもう一色ほしいところだが、表紙についても、路郎主幹にいろいろご無理をお願いしている。

柳人交歓暑中見舞廣告を募る  
川柳雑誌社

「言葉のあや、統篇」を「活字のいたすら」というタイトルで、私に、何かシャレたものを書いたらおもしろからうと、すすめてくださった。こんな明るい気持ちでお叱り(ではないが)をうけたのは、正直こんどが始めてのことである。

(一三夫)

藤井毛織株式会社 特約店

純毛製品 ジェルドリン 防虫加工  
**エアシップ**  
藤井毛織株式会社

足立株式会社 毛織物卸商

スマートで 着心地のよい

**O.S.K.**  
レディースード

株式会社 大坂商店  
大阪府東区平野町一丁目二番地  
電話(94) 1745-5563番

printed in Japan

(禁轉載)

**川柳雑誌** 第十三巻 第七号  
定価 六〇円 (送料四円)

B列5号 毎月一回一日発行

半力年 三八四円  
一力年 七二〇円

昭和三十三年六月廿五日印刷  
昭和三十三年七月一日発行

大阪府住吉区西四丁目二番地  
大阪府住吉区西四丁目二番地  
編集兼発行人 麻生幸二郎  
印刷所 麻生幸二郎

発行所 **川柳雑誌社**  
電話 大阪 六〇八一  
振替口座 大阪 七五〇五〇

**募集**

課題吟募集

教 え子 (廿句以内) 宮田不二選  
指 輪 (廿句以内) 河村日満選  
(七月二十日締切)

ミ シン (廿句以内) 小西無鬼選  
旧 家 (廿句以内) 八木摩天郎選  
(八月二十日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雜誌廿句以内) 麻生路郎選  
川柳塔 (雜誌十句以内) 北川春巢選  
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選  
(毎月二十日締切)

**投稿規定**

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
▼ 『近作柳樽』は一設作家の雑吟を募る。  
▼ 『課題吟』は誰でも投句が出来る。  
▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

# 朝凧見

なんば発

- ① 8.10    ② 11.45  
③ 14.15    ④ 18.10

観潮クーポン

お楽な日帰りコース 750円

観潮と淡路島周遊 900円

**南海電車**

お問合せ 南海交通社 ☎ 103,8686 ☎ 5038

# K.C T E X

ケー・シー・テックス

ト  
加

## 株式会社越田商店

本社 大阪市東区夏町四丁目 TEL ☎ 4573-6 番  
東京支店 東京都千代田区神田豊島町四番地 TEL ☎ 7886 番  
一宮支店 一ノ宮市花園通り二丁目 TEL 一ノ宮 ☎ 3919

# 楽しい…… お台所に

いますぐ、どこでも使える

新しい経済的な家庭燃料

御一報次第資料送呈又

特約店を御紹介致します



## マルキプロパンガス

岩谷産業株式会社

本社 大阪市東区本町3 電話大阪 ☎ 代表3251・8251  
営業所 東京・名古屋・京都・大阪・堺・尼崎・神戸・松江・広島・小倉

# 水虫の専門薬



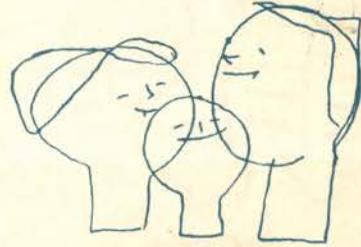
水虫には、断然御好評をいただいているアルバー！ 乾いた水虫には液、湿った水虫には粉末、両方に使える軟膏！ 3種で水虫の立体治療を！

## アルバー



東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64 551-2

洋酒の寿屋

ヤシカ 8mm 撮影機と映写機が240台当る

## ラッキーセール

- 抽せん券 トリスコンクジュース（徳用大瓶を含む）各1本ごとに1枚呈上
- 期間 5月11日から8月15日まで
- 抽せん発表 8月下旬（主要日刊紙紙上）

とても新鮮！とてもおいしい！

濃縮ジュースの最高峰！



## トリスコンジュース

- オレンジ・グレープ・レモン・アップル
- パイナップル・グレナデン………各300円
- オレンジ・グレープの徳用大瓶………各500円

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可  
 昭和三十三年七月一日発行（毎月一回一日発行）  
 編集 兼 発行 印刷人  
 編集主任 川柳雑誌社  
 発行所 川柳雑誌社  
 大阪市住吉区西五丁目三番地 電話 六〇八一 社務部 大阪七五〇五〇番  
 定価六十円（送料四円）